# KULIC

5

1972. 11

慶應義塾大学研究・教育情報センター

Keio University Libraries & Information Centers

# KUILC 5

## 目　次


特集　大学教育と大学図書館

1……＝座談会＝　大学教育と図書館の利用　神谷　不二　他
——或るゼミ・グループの例——

12……日吉キャンパスにおける大学図書館の存在　長谷川　茂　樹

13……理工学情報センターの利用者として　岩　丸　良　明

14……コインの裏表　中　島　紘　一

15……医学情報センターに望む　芦　沢　哲　夫

16……医学教育と医学情報センター　牛　場　大　蔵
——その現状と問題点——

19……足尾鉱毒事件覚書　小　松　隆　二

22……逐次刊行物の利用パターンに関する調査研究　奥　泉　栄三郎
——引用文献にみる法学研究者の情報・資料要求調査——

21……トピックス　公害関係文献情報サービスと資料展

26……昭和46年度私立大学研究設備整備費補助金
による購入図書資料一覧

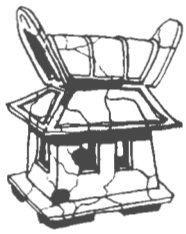
29……昭和47年度私立大学研究設備整備費補助金
による購入（予定）図書資料一覧

25……スタッフ・ルーム

32……編集後記


〈表紙〉孫福　弘　〈カット〉桐谷幸治


ＫＬＩＣ第５号＊1972年11月30日発行＊編集人 福留孝夫＊発行人 高島正夫
＊発行所　慶應義塾大学研究・教育情報センター本部事務室　〒108 東京都
港区三田2—15—45＊電話（453）4511（内線3027～8）＊印刷所　梅沢印刷＊



＝座　談　会＝

# 大学教育と図書館の利用

——或るゼミ・グループの例——

＜出席者＞

法学部教授
神　谷　不　二

法学部政治学科学生（神谷ゼミ）
三　宅　まり子（3年A組）
小　川　恒　夫（3年E組）
伊　藤　靖　宏（3年I組）
吉　田　和　宏（3年L組）
後　藤　順　一（3年M組）
板　垣　美　笛（2年H組）

情報センター所長
高　鳥　正　夫

三田情報センターP.S.部長
安　西　郁　夫

三田情報センター収書課長代理
渋　川　雅　俊

情報センター本部事務室室長代理
福　留　孝　夫（司会）

三田情報センター閲覧課係主任
森　園　　繁（記録）

**司会**　"情報センター"とは学生の皆さんにはまだなじみの少ないものかも知れませんが，ここに出ている「KULIC」という雑誌は情報センターが発足してから，特に塾内の利用者——教員・学生——を対象にしたPR誌です。これは発足の当初から，わりと研究者向けの編集に片寄りましたので，今日は学生の利用というテーマで，一つのゼミをとりあげて突込んだ声をじかに伺いたいと，この座談会を開きました。

初めに，慶応における情報センター計画や大学の図書館として，これまでどのようにしてやってきたか，なるべく簡単に所長から紹介していただければと思います。

### 情報センターの内容

**高鳥**　情報センターとして新しい組織がスタートしたのは昭和45年4月で，まだ2～3年ほど前の話です。塾内における図書資料の組織が各部門ごとにバラバラになっているので，それらを統一的にというか有意義的に再編成しようという計画を十年程かけて準備をして来たわけです。幸い塾には文学部に図書館・情報学科がありまして，その協力を得たり，図書館のスタッフや教員の声を集約しまして三田の情報センターがまず発足し，翌46年に医学情報センター，本年四月には工学部の理工学情報センターと日吉の日吉情報センターが出揃ったわけです。日吉の場合は，藤山図書館と研究室の図書資料部門とが一体となって運営されることになったわけです。そこで，どんなことをやってきたかということですが，大体図書館の仕事というのは地味な面が多いですから，学生諸君の目に見えて大きな変化が生じるということは

少いのですが，具体的に申しますと三田の場合，45年4月からとして，まずやりましたのが図書館3階の雑誌室を従来の閉架式から開架式にしまして誰でも自由に利用できるという仕組みにしました。それから学習用基本図書というものは，講義に密着したものでなければならないというわけで，履習案内を集めたり，学習用参考書というリストを調べたりして，和書で約千冊程新たに購入して学生の利用に供するということをやりました。また，図書館では書庫の中を大移動しまして，ご承知かと思いますが，18万冊程を入れかえして，学生諸君が書庫の中に入れるようにしたのが去年の四月からのことです。日吉でも今年の4月から情報センターという組織に変りまして，やはり最初に，4万冊程の書庫をこの10月から開架式にする準備ができ上りました。したがって日吉でも三田におけると同様，ある程度の学習基本図書を簡単に利用できるという方向を開いたわけです。図書館としましては，学生諸君の学習のために役立つ本を集めるということは大事なもんですから，これに気を配ってきたわけですが，教員に対してもどういう本が大切か何回かアンケートを集めたり，学生諸君からの投書を受けたりして，かなり積極的に蒐集してきております。しかしもう少し授業に密着したといいますか，ゼミの時とか，卒論を書く時どういう本の利用をされているかを今，司会者がいわれましたように，じかに伺ってみようというのがわれわれの希望の一つなのです。

### 神谷ゼミの内容

**司会**　いろいろなゼミによって特徴があると思うのですが，まず，神谷ゼミではどういうことをどういう形でやっていらっしゃるかを簡単に紹介して戴けませんか。図書館と直接結びつけなくても，一応，ゼミというものが一体どういう形で進められているかということです。

**神谷**　私のゼミは“現代国際政治”というタイトルからも解りますように，非常に参加学生の関心の範囲が広くて，卒論ということになりますと，例えば，地域的にいえばアメリカ，マレーシア，あるいは韓国の問題を扱うかと思えば，日中のことを取り上げる人もあるというように非常に，バラツキがあります。それから地域以外に内容をみても例えば，国際平和思想をテーマにとり上げる人もあれば核兵器を論じる人もあり，またかなり経済がかったことをやる人もあれば，極めて政治的な微妙な問題をやる場合もあるというように……平素のゼミの内容自体はそれ程バラバラな訳ではないんですが。時には私も良く知らない内容を選ぶ人もありますけれども，そこら辺りは各自でやってもらった方がむしろよかろうと，あまり規制はしない方針でやっております。そうすると，どうしても図書館にいろいろな文献資料が揃っていて，自分の選んだテーマがそれでほぼ満たすことができるようになれば非常によいのですが……学生がこういうテーマでやりたいといい，私もその構想は非常におもしろかろうと，さて一体文献資料がどの位あるかと見てみますと，図書館ではかなり基本的なものでも十分でないという面もありまして，なかなかむつかしいとは思いますが，おいおいそういう充足率が高くなってゆくことを望んでいるという状態です。

**司会**　もう一つお聞きしたいのですが，例えば2年生の時に神谷ゼミに入りますとそれは4年生まで続くわけですか？

**神谷**　法学部では，45年か46年からですか，ゼミを基本的に2年生3年生に移しています。そこで私のところでは，4年の初めには就職のゴタゴタに惑されるのも望ましくないというので，昨年から原則的に3年の終りには卒論を書き終るという体制をとっております。そうしますと反面，4年生のまとまりが悪くなりましてね，卒論が終っているとどうしても集りが悪くなるという傾向が出てます。ですから個人的には2年生3年生にゼミをおくという行き方自体が果してよいか悪いか今もって疑問は持っておりますけれど……そういうことになった時にちょうど私が憂應にきたもんですから，そういうものと思ってます。

**司会**　それは法律学科でも同じですか？

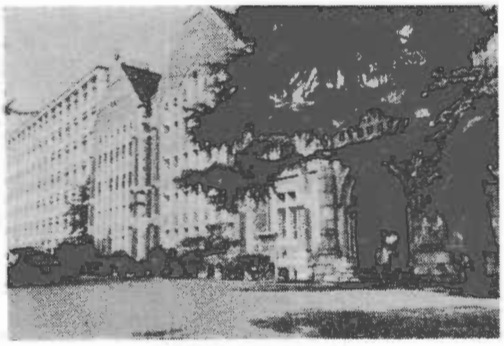
**高鳥**　原則としては3年4年で，希望すれば2

年3年でもよろしいということで，ごくわずかなゼミが2年3年でやっており，大部分は3年4年ですね。

**神谷**　ですけれどこれは今日のテーマにあまり関係ありませんね。

**司会**　それが関係あるんです。それがどういう形で行なわれるかによって学生の利用の形が違ってくるわけですね。各ゼミの特性がいろいろとありますから，そういう中身を全部捉えることはむつかしいですけれども，少しでも知って行くことが図書館側としては必要となってきています。

**神谷**　政治学科のゼミでも人によっては卒論は一応4年生の時に書かせるという人もありますけど，そうなりますと結局，研究会で2年3年4年と三つ持たなければならないということになり，なかなか大変ですね。だから，あまりその建て前と実体とをずらさないで，これを一致させるべきだと私は思ってますが……制度通りに3年の終りには卒論ができ上るというのは，まだ今の4年生1回きりで，したがって今の3年生諸君が来年3月には書き終えると，それが2回目のわけですね。若干の効用もありましてねエ，就職先から問合わせがくる時がありますと，何々君は非常に良く勉強している，それが証拠に卒論を書き終えております，と……(笑い)もうテーマもきまって製本もちゃんとできている，大学に出すのはこれです，と見せるわけですね。そうすると実に良い印象を受けるらしいです。もっともそれが目的ではないので，それはあくまでも付随的な効果でして……。



図書館（三田）正面

## 資料がない

**渋川**　神谷先生が仰った，資料が十分に揃っていないということと関係する問題ですが，ゼミの持ち方といいますか運営といいますかなかなかつかみにくい。これが図書館での学生，特にゼミを持って卒論を書く学生へのサービスをどういう形でやったらよいかという一つの材料になるんですね。神谷先生にその辺をもう少し詳しく伺えたらと思うんですが。

**神谷**　私の場合，年に2回位――1回でもいいですが，少なくともこういうものは揃えて戴きたいという私のゼミ，私の科目からの希望を聞いて戴けないだろうかと……そうすれば新しく出た本の状況とか，去年と一昨年のゼミの状況などを見比べましてね，こういう本をどうだろうかと希望を申し立て，採否はそちらでおきめになるでしょうが，そういう意見を聴く機会をお作り願えたらと思っていますが……。

**司会**　そうですね。これは今までは，わりとインフォーマルな形でそういう情報を得たと思うのです。そういう意味で，これを組織的に制度化するというのも今後の問題としてこちら側は考えた方がよいかと思います。実際にはカウンターで学生に接して，いろいろな質問が起る訳ですが，その背景が解っている場合と，そうでない場合とそのサービスの内容が非常に違ってくるんですね。

**渋川**　ポツンと来て，これが欲しいといっても，例えば，この人はどの先生のどのゼミに入っているともし解れば，アッ，こういうことを狙っているのではないかなとピンとくる場合が多いんです。その場限りでは考え方の違いといいますか，感じ方の違いでポイント外れになるものもあるわけです。

**司会**　先程の，図書館に資料がないという問題も，特にこれがゼミのテーマに係わる場合には，内容的にも時代的にも範囲が広いわけですね。どうも図書館での本の選定は評価の定まったものから購入する傾向があるわけです。そうすると現代を扱っている分野では本当に欲しいものが入って

いるかいないか非常にむつかしいわけですね。

**高島**　そうですね。実際に3年生諸君が自分から図書館に当ってみてどんな感想を持ったか，あるいは捜したものが全然なかったかどうか，その辺を……。

### 図書館を利用していますか？

**司会**　今日はあまり固くならずになんでも思いついたことを喋ってください。

**安西**　皆さんは図書館をよく利用されますか？一般的には，卒論を書く学生になりますと必要に迫られて図書館を利用する具合になるのですが……。これまでの統計によりましても学年別に見て4年生が圧倒的に多いです。現在の図書館では非常に使いにくいといったような率直な皆さんの感想を伺いたいと思いますが……。

**伊藤**　図書館の利用には三つぐらいの形があると思うのです。まず一つには行って本を借りる。二つには調べ物をする，つまり館内閲覧。三つ目は静かなので勉強をしに行く，といった順序ですが，僕自身としてみたら逆順で，三つ目の場合が一番多くて最初のが一番少ないという形になっています。

**司会**　図書館の座席利用ですね。現在の教育システムであれば，どこの大学でもそういうことが言えるだろうし，学生の側からみれば座席利用が非常に重要なウェートを占めていることですね。

**伊藤**　自習室があるので，そちらの方へと思うのですが，やはりイザと言う時ちゃんと調べられるというのが便利な点で，またアカデミックな雰囲気のためで……。

**司会**　それもありますね。まわりでやっていると，なんとなくこっちもやる，といったようなことになってくるわけで，その辺，図書館の効用は色々あると思うのですが……目に見えないものが……。

ところで，3年生ですと三田に今年来たわけで，まだ1年過ぎないわけですね。

**安西**　前の図書館の状態と今の図書館との比較が出来ないわけですね。

**神谷**　私のゼミは2年生もやってますから，政治学科のうちでは，比較的2年生から三田には馴染みのある方ですが。図書館とはどこまで馴染みがあるかは別ですけれど……。

**安西**　情報センターとなりましたのは一昨年の四月ですが，図書館に入ります場合で一番の変化というのは“入館証”というのを廃止したことでしょうか。それは皆さん経験ないかも知れませんが，それまでは入る時に番号札を貰わなければなりませんでした。その番号札は座席数しか用意してありませんから，特に試験シーズンになりますと玄関口に順番を待つ行列が出来るわけです。今は学生証を見せるだけでよいことになりました。そのため試験シーズンには非常に混雑するんではないかと心配もあったんですが，その辺は自然のコントロールでうまくいっている様です。

**神谷**　今，一番図書館を利用している人は誰ですか……。

**三宅**　そうですね……日吉の時，やはり入る時そういうのがありましたから不便だったんですけど，三田の方が便利だと思います。それから日吉の時は貸出期間が短かくて，また冬休みなど休暇に入る時には貸出をしないなどすごく不便だったんですけど，三田の方はそういう点が非常に便利で柔軟性がすごくある様な感じです。

**司会**　それですが，年々変って居りまして，日吉も大体一年位の遅れで三田と同じ様な形で，休み中も貸出をやるという風に徐々にその体勢を近づけて来ております。

三宅さんは随分と図書館を利用している様ですが，週に2～3回は入館していますか？

**三宅**　行く時はもっと行きますけど，試験の時とかレポート提出の時には頻繁に行きます。

**司会**　去年，安西さんが利用調査を行なった時に，やはり利用率が高いのは法学部の女子学生ですね。(*KULIC* 2号　参照)

**安西**　単行書と雑誌の利用とは違いますね。単行書の場合は絶対数から云うと圧倒的に文学部ですし，雑誌の利用においては法学部が多いです。なお単行本については，新刊の和書で学術的なも

のは殆どすべて購入してあります。ただし，雑誌については，これは年々継続して行くものですから予算との兼合いがありまして，新規購読は相当慎重に検討しております。

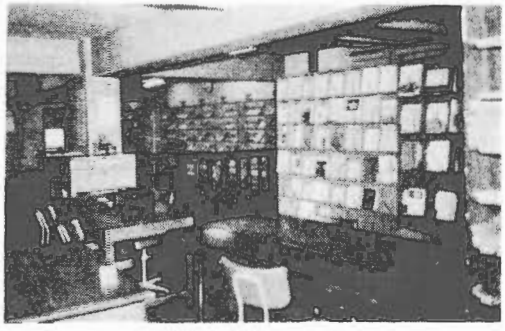
**神谷**　雑誌は，我々でも必要なものは個々に買っているので，やはり問題は単行本ではないですか。

**司会**　単行本については，去年皆さんが三田に来た時から直接書庫に入れるようになっているわけで，大体あれが18万冊位だと思いますが，あの程度で足りる…… 統計上はかなり足りている事になっているわけです。あれ以外の古い本を要する場合は直接書庫に入れませんから，カウンターに申し出るんですが，そういう経験がありますか？

**高鳥**　カードを引いて，この本と言って借りたことがありますか？

**伊藤**　ゼミでなくて，なんか他の演習課題で一度カードを引いてやりましたけど，出てきてみたらすごく古い本で，やる気がなくなりましたけどね。(笑)

**安西**　開架になってからは，目録を引かなくて直接行って現物を見て選ぶという人の方が非常にふえていると言えます。現在の開架書庫の18万冊で統計的には利用の全体の90%に達しています。非常によくセレクトされた新しいものが大体10万冊あれば，学部学生のニードは満たされるという考え方があるのですが，その点うちの場合は，その冊数の面からは不足がないと思われます。ただし書庫は今からおよそ10年前に建てられたもので



雑誌室（三田）

しかも閉架式の書庫として設計したのを無理に今のような開架式にしたので，たとえば通路が狭く照明も暗いんです。また暖房がなく書庫内の冬は非常に寒かったのですが，やっと，この冬から間に合うように，現在工事中です。

### 三田の図書館　日吉の図書館

**神谷**　その外に，どうですか，注文なんかは。

**小川**　僕は余り寄りつかない方なんです。それでも時たま気が向いて行きますと，座席だけを利用する方でまだ一度も本を借りたことはないんですが，行って見ると普通の日だと非常に混んでいるんです。そうすると勉強意欲がなくなって出て行っちゃうんです。夏休みなどはすいているので近くの図書館には行かないで，アカデミックな雰囲気を味わいに時たまきて，蟬の声など聞いています。

**司会**　夏でも利用者が結構多いですね。

**安西**　座席の絶対数が不足なんですね。それと椅子も貧弱で……。

**高鳥**　図書館の施設を拡張していきたいし，学生の閲覧室をもう少し広げなければ，と常日頃考えているのですが……。非常に利用率が高いのはありがたいのですが，行ってみると座席がなくってガッカリすると云われますと残念に思います，その点は……。

**後藤**　高校の図書館と大学の図書館とは全然違うべきなんでしょうけど，たとえば僕の高校では各クラスに図書部員というのがありまして，結局図書館と学生との結びつきというものをその人たちの仲介でやっていたわけですね。それで非常に活発に利用していました。ところで，この三田の山の図書館は重要文化財に指定されましたね。皆がそれを意識しているかどうか解りませんが…。日吉と三田の図書館とを比べますと，日吉の方が明るいんです，建物自体が。三田の図書館というのはなんかこう暗いですね。

**高鳥**　それが又，好きだという人もあるし，難かしいですね。

**後藤**　三田も最初はとっつきにくいけれど，今

は好きですね。日吉では椅子が好きなんです。こういう腕のあるものでわりと落着いて……。

**吉田**　僕はどっちかと言いますと，古本屋を捜して歩くのが好きなんです。つまり自分が好きな範囲の本は見なくちゃ解らない。ページをペラペラとめくって，アッ，ここが見たいんだっていうところがあればそういう本を読んでみたいんです。これは先程，言われた開架式でなければ，目録でやっただけじゃ自分として実感がわかないのと同じわけです。図書館ですと，神田の古本屋の様に気安くズラーッと並んでいるわけではないから一寸，なんとなくとっつきにくい……。

**安西**　古本屋さんより揃って居ると思いますけどね……。

**吉田**　向こうの方が何んとなくいろいろな本がありますから面白いんです。

**高鳥**　大学図書館では，大学での研究とか教育とかをバックアップするような本が中心になりますから，ある意味では堅い片寄りが出てくるんでしょうね。

**司会**　板垣さんはまだ日吉ですけど，三田に来た時はこちらの図書館に入ったことがありますか？

**板垣**　イエまだ一度もありません。

**神谷**　入る資格があるや否や自分で疑っているのでは……。

**板垣**　そうですね。

**安西**　その点ではどうぞ。塾生であれば誰でも入れます。これまでは，三田の図書館では三田に在籍している学生しか貸出してなかったのですが，今はどこのキャンパスという区別はありません。現に日吉の学生にも相当貸出しております。

**板垣**　日吉の図書館でちょっと前から気にかかっていたのは，あそこは館内閲覧でも一度には2冊しか借りられないんですね。私が利用するのは主に宿題のレポートを書く時なんですけれど，その時に調べる文献が2冊で済むということはないんですね。その点大変面倒で，同じような本を何回も取りかえたり……カードの題目だけで一応関係ありそうだと思って10数冊こうズラーッと番号だけ調べて，順番に見て，これは無いから返すとか，そんなことを1回やったことがありますが，すごく不便でした。

**司会**　それは確かにそうでしょうね。その点三田の方もまだ問題はありますね。

### レファレンスを利用しますか？

**神谷**　アメリカの図書館と比べて日本の大学図書館が一般に弱いということは，レファレンス部分じゃないですか。そういう専門の人がおりましてね，例えば七年戦役のことを調べたいんだけど，とその人に尋ねますと，その辺のプロフェッサー顔負けの程ザーッと教えてくれるわけですね。

**司会**　三田にも日吉にも一応そういう窓口がありますけど……。どの位役に立つかは知りませんが，それは大いに利用してみれば損はないと思います。

**高鳥**　この間，三田のレファレンスと日吉のレファレンスと質問の内容が違うかどうかを担当者に聞いてみたら，さすがに三田の方が難かしいものが多く，日吉の方での質問はわりあい常識的な質問が多いという話をしておりました。

**神谷**　三宅君など，よくそのレファレンスを使う……？

**三宅**　いいえ初めてです，お聞きしましたのは。そういうのがあるのですか？

**司会**　これはかなりＰＲ不足のようですね。

**神谷**　それを使うか使わないかによって随分効果が違いますね。

**高鳥**　そうですね。

**安西**　図書館の2階にありますレファレンス・ルームは，日本の大学図書館では慶應が一番先に開設したんです。したがって，かなり伝統がありますし，コレクションも比較的揃っております。人員も他の大学に比べますと充実しております。ただ利用者がレファレンス・ルームをうまく利用することをあまりよく知らないようですね。レファレンス・ルームは単なる閲覧室ではなくて（もちろんあそこの座席を利用しても結構ですが）完全オープンで色々な基礎的な参考書が置いてあり

ますし，係員がおりますからどんどん質問してください。例えば，こういうテーマのものの調べたいがどういうものを見たらいいか，というのはすぐに解ることです。もちろん難しい問題の場合は1日とか2日あるいはそれ以上費やして調査しないと解りませんが，それにしてもどんどん利用していただきたい。

**司会**　その点，森園さんはその道のベテランなんですが，カウンターでの学生について気付いたことは……。

**森園**　そうですね，質問する時はっきりテーマをいわない人がよくいるんですね。遠まわりにグルッとまわってくるんです　ストレートにいってくれないんですね。人と人が始めて逢った場合ありますね，すぐ言いにくい，ということが。実際，カウンターでも同様なことが起ってくる場合がありますね。

**高鳥**　まずお天気の話から始めて……(笑い)

**森園**　暫く話していますと，そのポイントがはっきりする場合があります。

**伊藤**　僕もレファレンス・ルームがあるのは知ってましたけど，どっちかというと，助手の方ですとか大学院の方に，ちょっとここやりたいんですけどいい本ありませんかというと，じゃあ，図書館のこういうところにあるから……と，非常にそっちのが多いですね。

**司会**　そういう点，特に三田の場合，レファレンス・ルームは2階に上がってしかもカウンターが奥まっているために接しにくいということがありますね。

**安西**　卒論とかゼミ・レポートの準備のために学生が使えるような文献利用案内的なものを作って行きたいと思っています　特に，これは三田の場合，人文・社会科学全般にわたってなかなか範囲が広いので大変なんですが　日本の場合，大学で文献利用教育ってものがないわけなんです。その点アメリカでは何々リタリチャーというものがありますし，一応，基礎的な文献利用法というものを心得ている……もっとも，中学校とか高等学校の段階で図書館活動の盛んな所では，図書館に関する授業を若干の時間やるとこもあります。慶應でも中等部など……。大学ではそれがやられていないんですね。

### ゼミの教育と図書館

**司会**　神谷ゼミの場合は非常にテーマが広いので，先生としては学生から頻繁に――文献利用上のアドバイスを求められると思うのですが，相手が多ければ多いほど先生の方が常に文献上の網を張っていなければならないということですね。

**神谷**　それとですね，去年の私の経験からいえば，これは新らしい問題ではなくて古い問題の方でしょうが“戦争”についての文献を探していた時の感じですが，慶應の図書館の歴史からみて，相当に揃っているのか案外そうじゃないのかという，その蔵書内容について，むしろ私自身の見究めがまだ十分ついていないんですヨ。実は図書館のどなたか，私，名前を忘れたんですが，「戦争についての文献を網羅的に揃える必要があるとかねてから思っているのですが，先生もそれに関心がおありのようだから一つ協力して揃えたい」と大変いいことをいったのですが，どなただったかちょっと思い出さないですが……。

**司会**　先生が最近，演説館で“現代の戦争”という講演をなさったですね。ところで「戦争文庫」というのがあるのですが聞いたことがありますか？

**渋川**　研究室書庫の7階に「戦争文庫」と呼んでいるコレクションがあります。これはどなたのコレクションだったか聞いていないのですが，終戦後の接収を免がれたものらしいですね。内容は大東亜戦争，すなはち昭和12～3年から19年までの間の戦争に関する経済とか政治・外交のほかに小説も入ってますし，また特派員たちの書いたものとか約3,500～600冊あります。その中に多少洋書も入ってます。

**高鳥**　ゼミの教育と図書館のコレクションとの関係が非常に難かしいですけれども，現在の図書予算の仕組みが研究室側と図書館側と別々になっており，コレクションも二つに分かれたような形

になって存在しているわけです。例えば戦争について先生が直接関心のある本を選択するとした場合，研究室蔵書に入るわけです。図書館の方で調べてみると，その蔵書の中に入っていないものがあるわけです。その点，塾内のどこにもないというのではなくて実は研究室の方でそれを選んで蔵書に入っている，というものがあるんですね。そういったように，われわれの方は現在行なわれているゼミとか授業の内容というものをできるだけ知りたいと思うのです。できるだけ機会をとらえて先生方が何をやっておられるか，学生諸君がどんな関心を持っているか，それには何を入れたらよいか，系統的に先生方の協力を得る必要が確かにありますね。

**神谷**　学生諸君も遠慮なく希望を出して……。よしんば古い本でもひょっとしてうまく探してもらえるかも知れませんね。自分の代には役立たなくても後輩に間に合うかも知れないし……そういうような地味なこともやった方がいいじゃないんですか。

**渋川**　現在は大体，書名と著者名がはっきりした，つまり幽霊ではないものでしたら全世界から確実に入手できるといってよいかと思います。その探すための道具もかなり揃ってきましたから，どこの誰のどういうもので何年頃に出たというものが確実に解りますからね。資料の入手というものが10年前よりかなりやりやすくなりました。もっとも金はかかりますね。

**司会**　学生の利用の場合はそこまで行かないですね。

**安西**　慶應にない文献については，外部の主として大きな大学図書館，国立図書館，海外の大学図書館，そこから文献の複写を取り寄せるなどのサービスをやっております。

**神谷**　それはしかし学生には必要……？

**安西**　大学院なんかそうですね。

〔高鳥所長退席〕

**伊藤**　今まではそのように執念深く追いかけた本はなかったのです。先程，板垣さんがいったように本を沢山積んで，アーこれはと思ったものを拾ってレポートを書いていたんです。どちらかというと僕たちはそちらの方が多いですね。

**安西**　三田の場合，館内閲覧は一度に3冊まで借りられます。また，昨年四月から書庫をオープンにした結果，館外貸出が激増したわけです。たしか前年度に比べて平均で約78%，学生だけでは113%増でした。本年度は今までのデータから推計しますと，おそらく昨年度より更に50%増すだろうと思われます。

### 館外貸出の問題

**司会**　皆さん館外貸出を利用したことありますか？

**三宅**　私もありますけど1冊というのはちょっと少ないと思います。せめてもう1冊ぐらい……。

**安西**　そういう風に激増しておりましてね。その一方，人手の方が増えないで非常にこまっているんです。私の立場としてもせめて2冊にしたいんですがね。仕事の面の増加をチャンとさばききれるだけのことを整えないと非常に無責任で…。

**司会**　そういう条件と，もう一つは貸出し冊数をふやすとなると，利用が集中する場合に備えて図書館では複本を多く持たなければならない。複本が少なければ貸出し利用のマイナス面も出る，というその辺の兼合いが……。

〔神谷先生退席〕

**吉田**　原書の貸出し期間が短いですね。もう少しなんとか……。英語の実力なんかタカが知れているし，そんな短い時間にやったって2～3頁で

レファレンス・ルーム（日吉）

終ってしまう場合があるんですよ。どうしたって期間を長くして貰いたいんです。

**安西**　1週間でもう1回更新できますから2週間は借りられるのですが，洋書の場合はたしかにそれでは短かいですね。

**司会**　初めから2週間ということも考えられますね。

**安西**　只今のところ，貸出冊数とか期間については幾通りもあるので，これ以上規則を複雑にするかどうか，問題を残しています。洋書の場合，確かに利用があまり重複しませんが，ほとんどは和書で，その場合複本を揃えるという問題が出てくるわけです。特に試験中になると同じ本に利用が集中する傾向があり，そこで独占という事自体が非常に問題になってくるわけです。

**司会**　そういう意味でカリキュラムと図書館が密着していないからともいえますね。これはよく例に出される話ですが，アメリカの大学では試験の時読むべき本はチャンと指定されます。そして1人が1時間しか連続して独占できないというような形で利用の平均的回転を計ることもあるわけです。それと，日本の場合はそれほど一所懸命勉強しなくとも単位は取れるということもあるし……。向うでの場合，図書館を使わないと絶対に落ちますから学生の方も必死なんですね。そういう緊迫感みたいなものが基礎にあるかないかということが大学図書館の在り方そのものと深く関係してくるとも云えます。

### 雑誌新聞の問題

**伊藤**　僕達が一番利用するのは，前にも言いましたように雑誌・新聞です。特に僕達の場合は今日的な問題をやっているので……例えば，田中内閣の世論調査でも「朝日」が62%で「毎日」が53%という違いが出たわけだから，一つだけ見るわけにはゆかないので，よく雑誌室を利用します。しかし始めにもどるのですが，やはり足りないという感じが……。雑誌の場合も例えば「文芸春秋」であればその中の神谷先生が書かれた一論文だけしか利用しないので1冊250円で買う気になれないわけです。雑誌はできるだけ多く揃えてほしいというのが僕達のゼミの特徴なんです。

**司会**　雑誌の種類は学生が使う範囲はほとんどあると思いますよ。

**伊藤**　270種とか……。

**安西**　あれは閲覧室に展示してあるのが270種なんです。

**森園**　約2,000タイトルあります。

**安西**　2,000タイトルといえば，ほとんど皆さんが欲しいと思われる雑誌は含まれている筈です。

**司会**　タイトル数のほかに最新号が到着しているかいないかということもありますね。

**安西**　それは若干書店より遅れますね。

**後藤**　新聞の地方紙は少いですね。

**安西**　これに手をつけるととても大変です。

**後藤**　政治学的には地方の声というのは大切になります。特に東京に居ますと地方の声を聞くのに三大新聞社が調査した世論調査しか利用できないです。例えば，沖縄の声なんか三大新聞に書いてある沖縄現地人の声と沖縄で出た新聞の世論と全然違うわけですね。

**渋川**　地方新聞では，いわゆる七大ブロック紙が来ているんじゃないですか。

**森園**　地下の談話室にあります。

**司会**　新聞の数というと一体どの位あるんでしょう……。

**渋川**　地方新聞となると，市単位までとしても一つの市で二つ位あるから総数は大変なものですよ。

**司会**　そういうものが全部あるのは国会図書館しかないですね。

**森園**　外国の新聞はタイムズ，ニューヨーク・タイムズ，プラウダ等々……ありますね。

**司会**　大体，一通りのものは揃っていますよ。外国の新聞を学生が使いますか？

**森園**　学部の学生が使うことは，まず殆どないですね。

**安西**　新聞の縮刷版はよく使いますね。

**後藤**　就職のために使われているんじゃないですか？

**安西**　相当古いものでもレポートなど書く場合に使うようですよ。

**後藤**　でも最近は予備知識が非常に重視されて来たと云われますので……。

**安西**　でも3階の雑誌室には十何年分のが出されているでしょう？

**森園**　「朝日」などは終戦直後の分から全部出されてあります。

**安西**　というのは，随分使われるからあそこに出したんですよ。やはりレポートの材料になるんですね。

### 図書館への要求

**後藤**　今よく考えてみても，また皆に聞いてみてもそうなんですけど，図書館に不満というのもないんですね。本も足りないと思ってないのに利用しないんですよ。今日のこの会合があるというので，ほかに聞いても「図書館に言うこと別にないよ」って言うし，「それじゃ図書館を利用するか」って聞くと「イヤしない」と言うし，どういうわけでしょうね。金持の息子ばかり居てみな本を買ってしまうというわけでもないんでしょうにね。

**司会**　塾内全部合わせると百万冊以上のコレクションになるわけですが，我々がそれを抱えて運営していて――歴史的に重要であることはわかるんですが――今，現在，キャンパスでこれがどういう形で生きているんだろうかと常に疑問を持つわけです。それを測れないし，結局，図書館が大学のシンボルとされ，シンボルであればいいのだ，となって来てしまいますね。

**安西**　今は情報化時代と言われており，図書館以外の情報のチャネルの発達がかなり影響していると思います。大学というのはアカデミックなところで，レポート一つ書くにしても卒論を書くにしても，相当文献を調べないと書けませんからね。それと，日本は比較的本が安いということがあってわりに個人で買ってしまう。外国では非常に高いから，相当な学者でも個人的に所有する本というのは限られていて，ほとんど図書館の本を使います。

**板垣**　3年生の場合は不満がないということでしたが，私の方は結構不満があって，同じゼミの中から聞いてきましたのが二つあります。一つは日吉の図書館では昼休みに本が借りられないんです。授業の間だと15分しかない上に，図書館は校舎から一寸離れていますから，お昼に借りられないのがすごく不便ですね。もう一つ，閉館が6時ですね。4時限とか5時限の授業をとってそれからちょっと調べて借りたいと思っても6時までだと充分に出来ないという声がありました。

私が感じていることですけど，私は女子大の附属高出身ですから女子大の図書館を使ったことがあるんです。それと比較して慶應の図書館を見るからかもしれませんが，さっき日吉の方が明るい雰囲気だと話が出たんだけれどあれでもまだすごく暗くって入りにくい気がして。なんか机や椅子も合わないのかすごく疲れるし，照明も暗い気がするし……，それに雑誌の閲覧室があるでしょう……。

**司会**　あれはなくしました。

**板垣**　私が行った時には狭くて見づらくて……

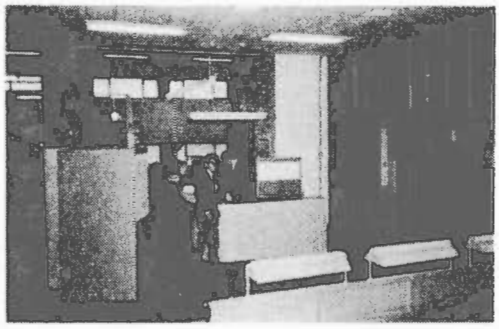
**司会**　半地階のような室で暗い感じでしたね。あそこは今は談話室みたいになり，新着雑誌は1階のレファレンス・ルームに配置してあります。

**渋川**　どこですか，女子大って？

**板垣**　日本女子大です。

**司会**　日本女子大の図書館は建物が新しい……

**板垣**　百科事典なんかも日吉の図書館だと普通



閲覧室（日吉）開架室入口

の本を閲覧する場所と別のところにありますね。あれなんかも本を読みながら百科事典を調べたいという時があるんですが階が違って，わざわざ行って調べて来てというと，かなりそれも大変なんです，

**司会**　これは先にも言ったように建物の構造上の問題ですね。ワン・フロアーが広ければ広い程そういったこともできるけれども，三田もそうですが一般のコレクションとレファレンス・コレクションと大体場所が別かれていますね。辞書的に使う資料というのはどうなんでしょうか，安西さん……。

**安西**　普通の辞書は三田の場合，開架書庫の入口の所に辞書の棚があります。だから辞書を見ながら本を読む時はあそこのを借りられます。もちろんレファレンス・ルームにもあります。三田のレファレンス・ルームの座席数はかなりありますから，そこで一般の本を読みながら必要に応じて参考図書を使うということもできます。一般の語学辞書についてはかなりそういう必要があるので別に何冊使ってもいいよう書庫の入口の棚に置いてあるわけです。

**司会**　本を読みながらそういうものを使うのはかなり入念な読み方ですね。

日吉の6時までの開館のことですが，三田の場合は夜間勤務の別なスタッフが居ますが，日吉にはそれがないわけです。それで昼間の職員が時間を延長してやっていますが，平常は6時すぎてからはほとんど利用者がないので，そのために夜間勤務者を配置するだけの余力がないという事情があります。そういう意味でも，冊数制限はありますが館外貸出の利用とか，自習室の使用とかでその辺の問題が補なえればありがたいのですが……

**渋川**　建物とかそういう物理的な基本的環境がアトラクティブであるかどうかということが大きな要素かもしれませんね。

**司会**　大きいですね。特に大学は一種の環境ですからね。

**安西**　図書館と自習室とでは雰囲気が違いますね。

**司会**　日吉の自習室は三田より落着いてますね。

**板垣**　三田は行ったことないですが日吉はすごく使いいいですね。

**司会**　話題が三田だけに止まらず日吉の問題にまで広がり，大変有意義でした。学園生活と図書館の関係は，古くして常に新しい問題だという思いがします。高島，神谷両先生は教授会のため途中で退席されましたが，本日はどうもありがとうございました。


## 刊行物の御案内

● 医学教育文献速報　隔月刊

● 図書館ドキュメンテーション文献集（和・洋）　月刊

（財）国際医学情報センター

東京都新宿区大京町30（〒160）電話357－8774

# 日吉キャンパスにおける大学図書館の存在

長谷川　茂　樹

（法学部政治学科１年）

先日，日吉の図書館に入ってみて，利用者が思っていたより多かったのですが，しかしよく考えてみれば，その利用者はいわゆる「常連」が多く，大半の学生はその類いではないようです。単刀直入にいえば，日吉キャンパスにかぎらず大学図書館の学生に占める存在意識は低いといえるのではないでしょうか。おそらく日吉時代の１年ないし２年間を一度も図書館に入ることなく去る人も少なくないように思えます。正直いって僕自身も，まだ塾生となって見物がてら三田の図書館に入ったことはあるけれど，日吉の図書館にはこの原稿を依頼されて初めて入ったというのが現状で，それまではただ前を通り過ぎるだけでした。友だちとの会話の中ででも，「図書館に行こう」などということばは聞いたこともないし，またいったこともないありさまです。

図書館が大学生の多くに利用されていないのが現状のようですが，だから本を読んでないとは勿論いえなく，家庭なり，下宿なりで本に費す時間は案外多いように思えます。ではなぜこのように現在の大学生に図書館の存在意識が低下してきているのかといいますと，私自身考えるには，極論になりますが，テレビ，ラジオ，映画，雑誌等に代表されるマス・コミュニケーションの発達の反作用として，必然的に読書に費される時間が減少し，それに本を読むにしても，本屋さんで買ったり，友人に借りたりして，図書館を利用するケースが以前よりかなり減少してきたのだと思います。勿論，一番の責任は大学生自身の不勉強でありましょうが，私達利用者側から図書館に対しての注文はやはり本の借り出しのときのめんどうな手続きや，諸規則にありましょう。その手続きや諸規則は当然のことをいっているのではありますが，どうにかしてもっと合理的にしてほしいものです。そしてもっと開架式の図書を増してほしいものです。ただ漠然と本が読みたくなったときに，すぐに読みたい本をみつけられるように，よりスムーズに借り出しできるようになれば，図書館の存在ももっと身近に考えるようになり，フランクな気持で図書館に行くこともできるでありましょう。

また私達日吉の学生は，教養課程の学生ですが，本を読みたいと思って図書館に行こうとしても，なにか難しい専門書ばかりしかないような先入観にとらわれ，つい図書館へ向きかけた足を変えてしまうようなことも少なくないと思います。私達日吉の学生は三田の専門課程の学生とは違うのです。少し次元の違うことかもしれませんが，教養課程の学生に合致した図書をそろえるということも大切なことと思います。

この原稿を依頼されて改めて，図書館の重要性というものを再認識させられました。やはり，学生自身の中で忘れかけられている図書館の存在を呼び戻すことが先決問題だと思います。現在のあまりにも騒しい世の中で，今後静かに本を読む場所としての図書館の存在はますます大きくなると思います。

私はこの原稿をいわば「大学生における図書館の存在意識低下」というサブテーマに基づいて書きました。私自身の主観によるものが大半ですがこれが一般大学生の考えと思います。大学教育と大学図書館という本来，密接であるべきものが，必ずしもそうでない今日，こういった試みは大変重要だと思います。

# 理工学情報センターの一利用者として

岩　丸　良　明

（工学研究科修士課程管理工学専攻１年）

理工学情報センターについて意見を述べるということは，私にとって難かしいことである。そういうのは，最近私自身が，理工学情報センターをあまり利用させてもらっていないからである。確かに建物へ足を運ぶことはある。しかしながら，そのことが直ちに“利用”と結びつくことにはなっていない。学部の頃は，もっと利用というにふさわしい訪問をしていたと思うが，矢上にきてから後，センターというものが非常に遠い存在と感じられる。小金井の頃に比して，センターとして大きくなり，その利用もより便利になっているはずなのに私個人としては利用しにくいものとなってしまっている。その理由のあるものは，明らかに私の利用の仕方の変化によるものであるが，また同時にセンターのサービスの変化も考えられよう。以下で，何故私がセンターをあまり利用しなくなったかを考えて，センターについての一個人の希望を記してみたい。

私達が図書館を利用するのは，一般に図書を参照する場合が多いが，最近，残念なことに，この要求が理工学情報センターによって満たされることは少なくなった。というのは，まずその蔵書で間にあうことが少なくなった，ということであり，また雑誌の貸出し禁止ということにも由来している。蔵書で間にあうことが少なくなったということは，明らかに私の利用方法の変化によるものであり，仕方がないと言われるかもしれない。しかしながら，要求される図書の多くは新刊本であることを考えると，必ずしも利用方法という面だけから片付けられない点もある。購入図書の選択という点が問題となってくるのである。今までに何度か図書購入の希望を出したこともあったが，残念ながら十分には受け入れられなかった。この受け入れられなかった事自体は決して問題ではない。私がここで希望したいことは，図書購入希望を公的に受け付けてほしいということである。学生の希望している図書を受付ける道を公的に示してほしいということである。図書を希望する場合は一般に緊急を要するものである。したがって，希望図書について，購入してくれるか否かの決定ならびにその公表が迅速に行なわれることも不可欠である。利用者の図書の希望を受け入れ，迅速に反応していくという姿勢が今後更に必要となってくるであろう。

ところで蔵書で間に合わない場合に，購入の他にもう一つ，文献複写サービスが行なわれている。他図書館の蔵書のコピーを取り寄せていただけることは，私にとっては非常にありがたい。矢上にきて，理工学情報センターを利用させてもらったというのは，この文献複写の場合であった。

小金井から矢上台に移って，雑誌の貸出しが禁止となった。正確には，オーバー・ナイトのみが許されている。この制限は私にとって非常にきついものである。確かにコピーをすれば済むことではある。しかしながら，大量の部数を必要とする場合（輪講等で利用する場合）には非常に能率の悪い結果となる。極端にいうなら，理工学情報センターの雑誌は読むためのものではなく，見るためのものとなっている。幸運なことに私は，外部図書館から同種の雑誌を借りることができるが，雑誌特に専門雑誌の取り扱いについては再考を要望する。

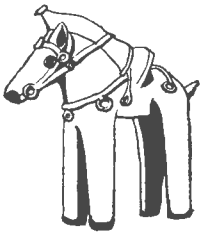
理工学情報センターを利用しないということ

は，その分を他の図書館に求めることを意味している。他のところで補なえる人はよいが，塾生すべてがそうできるとは限らない。塾生が，塾の図書館を利用せず，他の図書館に頼らなければならないということは極めて不自然なことである。せめて塾内だけでもそのようなことがないようにしなければいけない。塾生のための理工学情報センターを目指して，センターと塾生の希望を交流させることが大切であろう。

# コインの裏表

中島紘一

（理工学情報センター）



官庁や市役所の窓口，一般の公共サービス機関などはひとつの宿命ともいえる因果を負っている。サービスをよくすれば当り前となり，悪くなればたちまち袋だたきに会う。いわば，永遠に感謝されることがないという宿命だ。

理工学情報センターも同じ運命にある。小金井のオンボロ校舎の片隅で，この日あるを期して苦闘すること数年，ようやく新装なって開館し，職員一同，利用者ともども喜びを分ちあえるかと思ったとたんに激しい苦情が舞い込んできた。

“開館時間が短かすぎる。図書館を4時半で閉館するとはけしからん！”

小金井では当番制で毎晩1人づつ6時まで残った。100坪の小さな図書室だったからそれができたのだ。矢上に移ったら，通勤その他の理由で職員がバタバタと辞めた。補充は常に数ケ月遅れたうえ，建物の規模が，7倍にふえたので当番制で誰かが残ることが不可能になった。にもかかわらず，この理由は利用者にはなかなか納得してもらえなかった。

今年の5月になって，「閉館時間延長に協力したい」という工学部の学生グループの好意ある申し出があって，この問題は小康を得ている。ひとつの不満が片付くと，続いて2波，3波と新しいのがやってくる。目下，以下の諸点に不満が集まっている：

◇なぜ雑誌の館外貸出しをやらないのか？

◇なぜ複写をセルフ・サービスでやるのか？

◇なぜ研究室で買う図書の整理をやらないのか？

◇なぜ購入図書に学生の希望を反映させる制度がないのか？

不満を招く要素は，いわば，コインの表側である。公平な議論をするには，一応その裏側も見なければならない。

**なぜ雑誌の館外貸出しをやらないか。**その理由は，雑誌は館外に貸出さない方がより多くの利用者に利用の便宜を与えることができる。一冊の製本雑誌にはふつう50～100，あるいはそれ以上の異なる論文が収められている。この中で一回の利用で必要なのはふつうは一論文だけ。そのために1人が1冊を独占すると残りの全論文が利用の機会を奪われる。センターは，ある学科のある利用者の便宜を考えると同時に他の学科の他の利用者の便宜も等しく考えねばならぬ責にある。雑誌の貸出しに制限を設けぬと，今度は，「欲しい時に欲しい雑誌が貸出中なのは困る」という不満が生じるであろう。

**なぜ複写をセルフ・サービスでやるのか。**複写のオペレーターの仕事は単調きわまりない上に一日中立ちずくめなのでかなりの重労働と云える。

加えて賃金が安いので，人手不足の今どき必要なマンパワーを確保するのは容易ではない。複写の存続か廃止かの岐路に立たされ，存続の道をとるとしたら複写要員の確保までセルフ・サービスで続ける以外に方法がない。そこで急ぎの場合は原則としてセルフ・サービスとし，急がない時は物件を預り，後で職員の誰かが時間をやりくりして機械を操作する．という手順を採用した。セルフ・サービスはあくまでも一時しのぎである。

**なぜ研究室の図書の整理をやらないのか。**やりたくてもやれない，というのが現状である。一冊の図書（単行本）が整理を終るまでには10以上の工程を通る必要がある。このため，1人の1日の処理能力は5～8冊どまり。工学部の全学科研究室の図書を整理するにはそれだけで4人の専門職員が必要となる。この条件が満たされない限り，研究室の図書には手をつける余力がない。

**なぜ購入図書に学生の希望を反映させる制度がないか。**昭和45年度までは文部省の理科等教育設備助成金で年間100万円程度の学生用図書を購入できた。しかし46年度からは制度が変り，この助成金がなくなったので，学生用図書購入の財源が失われてしまった。通常の図書費はその殆どが雑誌の継続購入費にとられているから，雑誌の継続を一部中止しない限り新しい図書の購入の財源がない．購入希望図書の制度を論ずる前に実は財源の確保を論ずることの方が先とも云える。管理工学科の場合は研究室でプールした図書費の一部をセンターにあずけ，学科の図書委員が選定した図書をセンターで購入・整理して一定期間後，学生の利用に供することができるようになった。だから，管理工学科の学生は図書委員を窓口にして希望図書を購入する道はある。管理工学科とセンターとのこの取決めはまだ始めたばかりで実験の段階である。しかし成功すれば順次，他学科にも拡大して学生用図書の選択と購入の制度を確立し，その部分の充実の足場を築くことができよう。

# 医学情報センターに望む

芦沢哲夫

（医学部専門課程四年）

私達医学部の学生にとって北里記念図書館は四谷のキャンパスの中で最も馴染み深い建物の一つである。古風などっしりとした造りと玄関を入ったところにある北里先生の胸像が新入生の頃の私には「ああ，医学生になったのだな」という実感として残ったものだった。専門課程に進学し，初めはいささか気負って開けた入口の扉もやがて鼻唄と共に開けられるようになる。そして，私達にとって図書館は憩いとやすらぎの場となっていくのである。ある者は昼寝をし，ある者は雑談や討論をし，そして時々はデートの待ち合わせ場所にもなっている（らしい）。もちろん熱心に調べものをしている学生も多い。四年生になるとあわただしい病院内での実習が主になってくる。そこで，図書館は一人でゆっくり物を考えたり，知識を整理することのできる数少ない場所として重要なものになってくる。

このように私たち医学生にとって，図書館は単に情報を入手できるところというだけでなく，知的な休息を与えてくれるサロンのような場所という意味をもっているのである。こういう意味で私たち学生にとっては「医学情報センター」という名より「北里記念図書館」という名の方がしっく

りいく。これは国際医学情報センター（財団法人）が別に発足した今日でもそうであり，これからもそうであるような気がする。私達は医学部の創設者である北里先生の名に一つの誇りを持っているのである。

私達はここで情報サービスを受ける機会をかなり頻繁に持つ。しかし，殆ど不便を感じたことはない。唯，初めて図書館に入った時には文献の捜し方がわからず，随分戸惑った事を覚えている。おそらく図書館利用の手引きのようなものを配布されたのだろうが，はっきりした覚えがない。簡単な説明書が館内にあっても良いと思う。

もう一つ感じることは，調べたいと思う雑誌が時々貸出されていることである。多くの場合，雑誌はその中に掲載されている一，二の論文を調べる為に必要とされていることが多いのではないだろうか。新刊書を通読することはあっても，古い雑誌を引っぱり出して最初から最後まで読むということはまず無いであろう。又，前年度以前の雑誌はそれぞれ年度別に製本されているので，一つ二つの論文の為に，その年度の雑誌全部が貸出されてしまうことになる。そして一週間は戻ってこない。前年度以前の雑誌は貸出しを制限した方が良いのではないだろうかと思うのはこんな場合である。尤も，何かの特集号の場合には，どうしても一冊全部を必要とすることが多いので貸出しの制限は無理であろう。

私たち学生は，特に一，二年の頃は雑誌よりはむしろ単行本を利用することが多い。医学書は一般の本に比べると高価なので，自ずと図書館の本を利用することが多くなる。ところが雑誌に比べると，単行本のコレクションはかなり見劣りするような気がする。医学は日進月歩であるのに古い本が多い。改定版が出たら速かに旧版と入れかえられないものだろうか。又，良く利用される本はいつも貸出されて閲覧室には無い。しかも一冊しか無いものが多いので，それが貸出されると二週間はその本にお目にかかれない。しかも，こういう本に限って返却が延滞することが多いようである。よく利用される本はもっと冊数を揃えて欲しいものである。

いくつかの希望を述べたが，実のところ私は現状に殆ど不満を感じていない。情報の入手は非常に速やかに且つ円滑に行なわれていると思う。今後さらに文献の数が増えていくであろうが，常に欲しい資料がどんなものでも速やかに手に入るような機能を維持されることを期待したいものである。

# 医学教育と医学情報センター

## ——その現状と問題点——

牛　場　大　蔵

（医学部教授）

まず大学における医学教育とはどういうものかを考えてみよう。数十年前まではただ医学部の学生の型にはまった教育があり，せいぜい1年間のインターン生に対する，それも不十分な教育が，医学教育のすべてと思われていたフシがある。

時代はかわって——実は世界ではずっと前から——，いまや医学教育はたいへん幅広いものとなり，それを専門に研究しなければならない時代となった。その拡がりは間口，奥行きともどもである。たとえば現在および将来の医療のあり方は，

とうてい個人的のものでありえず，きわめて多くのパラメジカル，あるいは医療補助要員を含んだチームの編成によってなされねばならない。ここに，たんに医学教育といっても医師の養成はもちろん，看護婦，種々の医療関係技師その他の教育が，大学においても真剣に考えられねばならなくなった。つまり大学の医学教育は従来のような1大学付属病院をもった1医学部の構成では不可能となり，まさに“医学センター”としての規模を必要とすることにある。

もう一つの面はいわば連続的の面で，医学進学課程から専門課程，さらに卒後研修，生涯教育へと連なる教育の過程が，大学においても必要とされることになってきた。真の意味の一貫教育であるが，たとえば進学課程と専門課程の学科間のインテグレーション，専門課程における基礎・臨床間のインテグレーションの必要性は火急とされる。また卒業直後の臨床研修も全国的な市中の教育病院との協同が叫ばれつつはあるが，やはり大学病院はその中心にならざるをえない。さらに近時“cntinuing medical education”の名の下に強調される生涯教育もまた，医師会や任意団体との協力の下に，やはり大学も一半の責を担わねばならないであろう。

このように急速に変化しつつある大学の医学教育に対応して，医学情報センターのあり方は認識され，改善されてゆかなければならない。そこには医学生――それも進学課程の学生を含んで――看護婦および多くのパラメジカル要員とそれらの学生，学内外の卒業後の医師等々に対する医学情報の提供が求められるであろうし，同時に教育者に対しては専門的な教育技法に関した情報や設備の提供も，必要となってくるであろう。

そこで以上のことをふまえて，現状の医学情報センターを考えてみよう。まず医学部は地理的条件から進学課程が離れているために，遺憾ながら進学・専門課程のインテグレーションに対応する資料がセンターには揃っていない。ここで医学部におけるカリキュラムのすう勢にふれる必要があるが，将来ともその改革は必至であって，社会医学あるいは一般社会学的科目の増強――たとえば人類学，人類生態学，行動科学，医学心理学その他――の傾向は，進学・専門のインテグレーションをまつまでもなく，医学情報センターにおける重要な関心事となろう。

また従来の専門課程カリキュラムそのものについても，医学知識の膨大化に伴なう必然的なこととして，“core curriculum”と“elective course”が平行する傾向は必至であり，それに伴なって医学生向けの参考書などは大幅な変化と増強が望まれてこよう。また教育技法の進歩によって，現在の学生向けテキストブックの整備などの外に，ビデオテープ，映画など多くの視聴覚教育設備が要望されてくるし，すでにアメリカでみられているコンピューターによる教育技法にも関心をもたざるをえなくなってくる（これらはたんに医学生対象のみではない）。

看護婦，厚生女子学院学生，パラメジカル要員に対するセンターの現状はきわめて貧弱といわざるをえまい。これらについては医学部（将来の“医学センター”）構想そのものに因るところが多いので，センター単独での整備は無理であろうが，必要性の認識は高められるべきである。

ついでながら医学生をはじめ，すべての学生に対して，現在のセンターのスペースはあまりにも狭い。書庫その他の活用にはみるべきものがあるが，建物自体の限界のゆえにその拡張は絶対に不可能な限界に達している。

卒業後の教育，生涯教育に対しては，学生の場合とやや趣きをことにして，医学の研究面の情報が主体となろう。この点においてセンターは日本に誇る内容をもち，たしかにその活動は自他ともに許してよい。もちろん欲をいえば限りないが，生涯教育に関する生まのデータ蒐集などは今後に残された問題であるにちがいない。

最後につけ加えたいことは，冒頭にもちょっとふれたように，医学教育自体が研究の対象となってきたという認識についてである。熱心な教師と優秀な学生によって，効果があがった過去の医学教育の時代はもはや過ぎて，医学教育そのものの

改善は医師・医学者の片手間では行かなくなった。教育の技法，評価の方法，カリキュラムの編成，そして何よりも真に社会のニードに対応しうる医学教育のあり方の検討を含んで，新しい「医学教育学」はすでに誕生している。これによってほんとうの“医育者”も生れてくると思われるが，医学情報センターはこの学問と人材の養成について，新たな対応を余儀なくさせられることとなろう。この時期が一刻も早いことを医学教育に関心をもつ一人として，私は強く望むものである。

## <スタッフルーム>

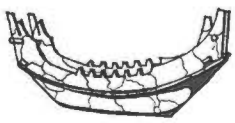
### ―雑　談―

木村八重子

この夏，日仏文化センター主催の「第6回フランス語研修旅行」に参加する機を得た。

La Rochelle の Lycée を借りての，ポアチエ大学夏期講座は，7月16日から8月11日の4週間。この参加時期は，前期と後期の中間にあたり，2週間ずつでクラス変更があった。

午前中ギッシリ詰った時間割に加えて，担任の先生が発音の勉強が必要とみなした生徒にはorthophonie（発音矯正）を受けさせる。注目すべきことは，全ての時間に一貫してテープ・レコーダーが使用され，単に教科書を読むというのにとどまらず，まず，音から出発する。全く緊張を要する授業である。



この講座の参加者は実に国際色豊かで，スペイン，イタリーなどのラテン系からドイツ，オーストリー，イギリス，アメリカ，そして北欧はスウェーデン，ノルウェー，フィンランドの若者達。アジア人の数は少く，日本人は目立つ存在であった。朝，昼，晩，彼等と食卓を共にする。共通語はフランス語で彼等は話が好きである。従って，われわれも黙っているわけにもいかず，つられて話すということになる。

La Rochelle はフランスの南西，大西洋に面した古い港町である。古くは，宗教改革の時期プロティスタントの教区の一つであったことなどから，歴史的な足跡がそこここに見られる。Hôtel de Ville（市庁舎）しかり，そして古い石造りの建物の並ぶ一角に静かなたたずまいで市立図書館がある。全く目立たない。

入口の扉を開くと左手に，螺施状のしゃれた階段が目に入る。右手に小説類があつめられた開架室がある。次に階段をのぼって2階，二重の扉を開いて入ったすぐには，目録と本の展示ケースが置かれている。その右奥には，参考図書や逐次刊行物が設置され，非常に天井の高い年代を思わせる落ち着いた部屋である。3名の女性館員がおっとりした，静かな面持ちで働いていた。私は写真撮影の許しを乞うた。快く許可してくれた上に，一つの部屋に私を導き，この部屋を是非，二つの角度から撮りなさいと指示までしてくれたのである。そこは実は，大変歴史的なコーナーで，“La grande galerie”といっていた。後で，貸してくれた文献によれば年代としては1831年にさかのぼる。示してくれた視角の写真がやはりその文献にものっていた。今は exposition（陳列，展覧）のための部屋になっているそうである。La Rochelle における図書館の活動の歴史は古いが，いろいろな困難な事態に直面しつつ，市民の目覚めと協力，見識ある図書館員のたゆまぬ努力によって今の実を結んでいる。子供のための奉仕から，青年そして大人へと適した奉仕を拡大，発展させて行っているようである。

図書館を出ると，広場に面した café―“Café de la paix”―で café au lait とか thé とかを頼んで，しばし語らい，のんびりした時を過すのである。追いたてられることはないので，café 一杯で何時間もねばることしばしばであった。

（日吉情報センター職員）

# 足尾鉱毒事件覚書

小松隆二
（経済学部助教授）

## 1

ここ2，3年来の公害ブームで，長い間忘れ去られていた足尾鉱毒事件が記憶のなかによみがえってきた。私事になって恐縮であるが，足尾鉱毒事件なり田中正造なりについては，私もいくつかの思い出をもっている。

足尾鉱毒事件にたいする私のかかわりは，最近の公害ブームよりずっと古く，今から12，3年前にさかのぼる。それは，私が大学の卒業論文に「足尾鉱毒事件と田中正造」を選んだことにはじまる。それ以来，足尾銅山に源を発する鉱毒被害地である渡良瀬川にも何度か足をはこぶ機会をえた。足尾鉱毒事件や田中正造にかんする行事にもしばしばかかわりをもってきた。また文献・資料類も相当数手もとに集めることもできた。

私が最初に渡良瀬川沿岸を訪れたのは，1960年（昭和35年）の春であったと思う。佐野市小中にある生家や菩提寺など主に田中正造の旧跡を訪ねてまわったのであった。そのさいの成果の一つは，宇都宮の古本屋で鉱毒被害民にあてた田中の葉書と古い貴重な文献を安く入手したことであった。葉書のような生まの資料が一つ手に入るとふしぎなもので，それからというもの珍しいものがよく手もとに集まってきた。当時はまだ古書類もそれほどひどい高値をよんでいなかったことも幸いであった。そんなことで，その後いつの間にか足尾鉱毒事件や田中正造にかんする文献・資料が私の蔵書の重要な一部を形成するほどになっていった。

二度目の渡良瀬川訪問は，1962年（昭和37年）4月4日，「社会運動史散歩の会」と称して，在京の研究者・同好家十数名ででかけたときであった。それは，もともとその前年（1961年），<田中正造直訴60周年> を記念して催された小集がきっかけとなって実行されたものであった。

その記念の小集は，1971年12月10日，田中の直訴決行の日を選んで，田中と親交のあった故石川三四郎の旧宅（東京都世田谷区八幡山）で，在京の有志によって催された。私もその企画や開催にかかわりをもった。その小集では，田中や足尾鉱毒事件にかんする文献・資料も多数陳列された。私も書簡をはじめ，かなりの資料を出品した。念のため，そのときの主な出席者を記すとつぎの諸氏であった。

天野敬一（1900年の川俣事件の弁護人），荒畑寒村，森長英三郎，遠藤斌，後閑林平，品川力，白仁成昭（谷中村強制破壊当時の栃木県知事白仁武の孫），石川永子（石川三四郎養女）ほか。

この小集では，アルコール付で夕（昼？）食会も催されたが（戦前の社会運動家で，高尾平兵衛らと戦線同盟も結成したことのある平岩巌氏が，たしか食事を差入れられたのを記憶する），その席での雑談がきっかけとなって，先ほどの「社会運動史散歩の会」と称する渡良瀬川訪問も実行されることになったのであった。4月4日を選んだのは当日藤岡町にある田中霊祠で田中の50年忌祭が行なわれることにあわせたものであった。そのさい訪ねてまわった場所は，やはり田中の旧跡にかかわるところが中心であった。当日の参加者は，荒畑寒村，後閑林平，川合仁，品川力，遠藤斌，木下哲子（木下尚江遺族），塩田庄兵衛，山極圭司，村田静子などの諸氏で，現地で旧谷中村村民の一人で田中正造とも行動を共にした島田宗三氏が合

流して案内役をつとめてくれた。

2

その後，アメリカ留学などもあり，1965年ころから，私はしばらく渡良瀬川を訪れる機会をもてずにいた。一度だけ1970（昭和45）年4月18日，稲葉誠太郎氏らの主宰する栃木史心会の第11回例会が足尾町で開かれた折に，それに参加して足尾銅山を見学する機会をえたのみであった。もちろん，その間といえども，足尾鉱毒事件や田中にかんする文献・資料の蒐集をつづけたことはいうまでもない。群馬県館林市にありながら，渡良瀬川の土手ぶちに位置する雲竜寺におかれた鉱毒事務所関係の書簡，ビラ，パンフレット類も入手することができた。おかげで，個人では他の誰にもひけをとらぬほどの文献・資料をかかえるほどにもなった。

ふたたび，私が渡良瀬川訪問の機会をえたのは塾内の教職員，学生への教育・研究上のサービス機関である「大学生活懇談会」の活動をつうじてであった。

大学生活懇談会の三田地区が担当し，全地区に参加をよびかける企画として，1971，72年度にとりあげられた一つの対象が<産業と公害>にあたるテーマであった。その結果，懇談会の活動として，<足尾銅山と鉱毒被害地見学会>が正式に決定してから，企画を具体化するために，商学部佐藤芳雄教授，中井芳雄学生部事務長，藤沼貞弘学生部職員の諸氏と，本年4月7日，現地視察にでかけた。このときが，私にとって三度目の渡良瀬川訪問であった。当日は，雨であったが，古い懐しい知友を訪ねるような愉しみを抱いて，関係地をまわったのをおぼえている。

その本番は，6月9，10の二日間であった。参加者の内訳は，学生が40名，教員が佐藤芳雄(商)，浜田敏郎(文)，飯田鼎(経)，それに私の4名，職員が岩野節夫(学生部)，藤沼貞弘(学生部)，尾関みゆき(学生部)，桐谷幸治(管財部)の4名であった。

6月9日，朝8時に2台のバスに分乗して三田を出発し，茨城県古河市に直行した。そこから順次見物に入った。旧谷中村跡地（渡良瀬遊水池），田中霊祠，田中の生家，雲竜寺などをめぐったのち，群馬県大田市毛里田地区に入り，鉱毒根絶期成同盟の人たちと会見した。そこで板橋明治会長の話をきいたり，意見交換を行なったり，また近辺の田畑の視察を行なったりもした。そのあと，足尾に入り，その夜は，神奈川県大磯から移築したという陸奥宗光の別邸・豊潤堂に宿をとった。夕食後全員で自己紹介やら1日の見学の感想やらを話しあったりして，その日のしめくくりをつけた。翌日は，足尾銅山の選鉱場，通銅坑口，製錬所などを見学。所員の説明と案内をうけたあと，独自に鉱業所周辺の被害状況などをみてまわった。

3

これまで数回にわたる渡良瀬川訪問を思い出し，また苦労して集めた資料の束を前にして，最近の公害ブームを思うと，今さらながら感慨もあらたになる。そのブームのおかげで，今では足尾銅山，その鉱毒事件，あるいは田中正造というと，否応なく公害とむすびつけてうけとめられる。足尾鉱毒事件が公害第1号事件といわれ，また田中がその運動の指導者であったのであれば，当然のことであろう。

もちろん，公害ブームには私も私なりに大いに関心をもっている。しかし，私が田中正造をとらえる場合は，そのような視点のみにとらわれることはないだろうと思う。田中をことさらそこに限定することは，必ずしも田中の全体像をとらえるのに有効とは考えていないからである。すなわち権威や権力にとらわれず，人間性を追求した彼の平民主義的な視点，理想主義的な視点が背後にのぞくことをおそれるのである。

いずれ，私なりの視点で田中を解明しようと思いつつ，未だにはたしていない。田中の天皇および天皇制観，鉱毒反対運動に参加した農民階層の問題，古河鉱業側の対応など，多くの点が未解決のままのこっている。それに，私の関心も，足尾や田中の問題のみに限定しきれないほど，いくつかの問題にわたっている。したがって，私の手も

とにある文献・資料も，多くはねむったままである。今はこれらの資料を有効に生かせる日の一日も早くくることをねがっているだけである。

トピックス

## 公害関係文献情報サービスと資料展

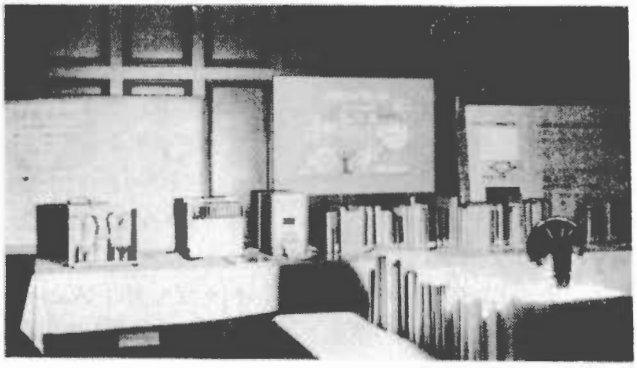
去る10月3日（火）から6日（金）まで，三田の図書館記念室で，各地区の情報センターや塾外の機関の協力を得て標記の資料展が行なわれた。公害についての国際的なレベルにあるサービスとして，医学情報センターが行なっている“大気汚染に関する抄録作成作業”での Air Pollution Technical Information Center (APTIC) への協力や JICST の環境公害文献集への情報提供の紹介（詳細は *KULIC* 第4号 p. 13—15 参照）のほか，現在所蔵する全塾の図書395点（和書267点，洋書128点），専門雑誌，索引誌，抄録誌 44点（和22点，洋22点），和雑誌，特集号，臨時増刊31種（80冊以上）を展示し，一覧に供した。

公害問題は研究対象としても多面的で，Inter-disciplinary（学際的）なアプローチを要請されているので，今回の展示を契機として，資料の収集面での各地区研究者，教員からの要請，希望が寄せられることが期待され，利用面での資料の効率化がのぞまれる。また学生には実態把握の一助として，窒素酸化物測定サンプラーやデジタル粉じん計等の参考出品が，関係者の好意と各専門機関の協力を得て行なわれた。また三田では，はじめて16m/m映画の上映（生体と大気汚染，恐るべき大気汚染など）が小閲覧室で実現し，小人数ではあったが，熱心な視聴者を集めた。三田での学生の反響として展示終了後の関係図書の閲覧，帯出希望の申出が見うけられた。

なお，専門資料中最も手薄な分野については，十数点，全国市有物件共済会防災専門図書館から，参考出品を得た。このことは当該部門での資料の充実もさることながら，書誌，書目の利用による塾外資料へのアプローチを積極的に行なわねばならないことが痛感された。

（笠野）

＊「公害関係文献情報サービスと資料展」展示目録（昭47年10月，34頁）は，三田情報センター総務課（内線3412-3）に残部あり。



# 逐次刊行物の利用パターンに関する調査研究

## —引用文献にみる法学研究者の情報・資料要求調査—

奥 泉 栄三郎

（三田情報センター収書課）

大学の研究・教育情報の総合的センターとして大学図書館の機能を積極的に考えるとき，研究者集団が，どのような逐次刊行物をよく引用しているか，または利用しているかの実態を把握することは，資料の収集計画やレファレンス・サービス活動に欠かせない基礎データであると思われる。

10数年前，A. D. Osborn 博士は *Serial Publications, their place and treatment in libraries* という名著の中で「図書館史上，何年か先に逐次刊行物時代として知られるような時代がやってこよう」（同書 p. 283）と予言したが，以下の分析結果もこの傾向を示唆しているといえよう。

### I．調査の目的と方法

この調査の目的は，主として次の3点にある：①引用文献分析法（citation analysis methods）により，逐次刊行物の利用パターンを考察する。②上記のデータを文献資料の収集および利用の観点から考察する。③上記のデータの生起する背景について，できる限りの考察を加える。

引用文献分析法は，それ自体初歩的な技術であり，発想であるが，従来のこの種の調査研究のほとんどすべてが書誌上の知識と主題的知識の上に実施されたものであり，意外と高度な判断の要求される手法である。調査の方法は次のとおりである：

A）Source Journals の決定……大学法学部の紀要類から任意に①「北大法学論集」②「法政研究」③「九大法学」④「法学新報」⑤「阪大法学」⑥「法学」⑦「法学協会雑誌」⑧「早稲田法学」の合計8誌を抽出。

B）Source Articles の決定と対象年次の決定……1965年～1969年の暦年5ケ年を対象期間とし，調査者の判断による原著論文471件を抽出。

C）引用文献の定義と視点……今回の調査における引用文献とは，上記原著論文において，本文中，割注，脚注，論文末に出現した文献のうち逐次刊行物のみを"引用文献"とみなした。但し判例集は除外した。

D）集計フォーム等の決定……特製リポート用紙を印刷し，年次別，誌名別，論文別の各リストを作成，更に citation のカウントの為に標準目録カードを使用。

以上により，得られたデータをまとめると次のようになった：

| | | |
|---|---|---|
| 調査対象誌 | | 8誌 |
| 調査対象論文 | | 471件 |
| 引用文献（逐次刊行物） | | |
| 回　数 | 和文誌 | 3,874回 |
| | 欧文誌 | 3,698〃 |
| | 計 | 7,572〃 |
| 種類数 | 和文誌 | 342種 |
| | 欧文誌 | 507〃 |
| | 計 | 849〃 |

### II．"引用文献"の形体と表示法

法学領域において，"引用文献"として上げられる二大形体は判例集（Reports）と雑誌（Legal Periodicals）である。

判例を引用する際は，かなりの程度で Abbreviation が用いられ，判例法国においては慣習的に略形式が統一されており，わが国の法学者も大体これにならっている。

例えば米国の *National Reporter System*（1884＋）は法律図書大手出版社である West Publ. Co. が発行しているもので，各州最高裁の判例全部を収

録しているものであるが，引用の場合には Official Reports（官版）と併記して，次のように表示されるのが普通である：

Aledo v. Honeyman 208 Ill. 415, 70NE 338.

v. は against の意味であり，原告 Aledo 対被告 Honeyman, Illinois 州の Official Reports の 208巻415頁と *National Reporter System* の *Northeastern Reporter* の70巻338頁を引用表示したものである。

次に雑誌名の略表示について触れておきたい。略表示については Coden Code や国際逐次刊行物誌名略語表（International List of Periodical Title Word Abbreviations）に匹敵するルールは法学領域にはみられない。しかし，米国法律図書館協会（A. A. L. L.）や H. W. Wilson 社系の表示法と Harvard 大学を中心とする全米大学院法律学校協会（AALS=Association of American Law Schools）系の表示法が主流としてあげられる。主な相違は次の例示によって明らかである：

Harv L Rev 84 : 1577 My '71（A. A. L. L. 方式）

84 Harv. L. Rev. 1577(1971)（Harvard 方式）

### Ⅲ. 主題拡散度

ここでいう主題拡散度とは，引用された誌名が法律領域個有のものであったか否かの尺度である。つまり，他の主題（専門領域）への依存度と貢献度を割り出してみようとするものである。

まず和文誌の分析の結果では，第1表の示すように，約8割が社会科学領域内の逐次刊行物であることがわかった。つまり，和文誌342種のうち270種（78.9%）のものが社会科学領域のものであった。誌名により主題分類することは粗雑さを免れないが，政治（310），経済（330）が法律（320）と密接な関係にあることが計量的に立証されている。しかし，経済学を中心とした引用文献調査の宮地論文[1]と比較すると，法律領域では他の主題から研究材料を借用する割合には，他の主題への貢献度は逆に少ないといえる。このことは法律領域の特殊性，専門性を側面から特徴づけている点といえよう。引用文献としてあげられた欧文逐次刊行物は5回以上引用111種，5回以下396種となった。欧文誌の主題拡散度の分析は主として前者（5回以上）のグループについておこなった。

和文誌にならって日本十進分類表（N. D. C.）に準拠したが，さらに法律（320～9）は要目区分

**第1表**：主題拡散度

| 日本十進分類（N. D. C.） | 和文誌 タイトル数 | 和文誌 百分率（%） | 欧文誌 タイトル数 | 欧文誌 百分率（%） |
|---|---|---|---|---|
| 000：総　記 | 48 | 14.03 | 1 | 1.00 |
| 100：哲　学 | 3 | 0.87 | — | — |
| 200：歴　史 | 6 | 1.75 | — | — |
| 300：社会科学一般 | 11 | 3.21 | — | — |
| 310：政　治 | 32 | 9.35 | 10 | 9.00 |
| 320：法　律 | 154 | 45.02 | 95 | 85.70 |
| 330：経　済 | 43 | 12.57 | 1 | 0.90 |
| 340：財　政 | — | — | 0 | — |
| 350：統　計 | — | — | 1 | 0.90 |
| 360：社会学・社会問題 | 15 | 4.38 | 2 | 1.80 |
| 370：教　育 | 12 | 3.50 | — | — |
| 380：風俗習慣・民族学 | 3 | 0.87 | — | — |
| 390：国防・軍事 | — | — | — | — |
| 400：自然科学 | 1 | 0.29 | — | — |
| 500：工　学 | 1 | 0.29 | — | — |
| 600：産　業 | 11 | 3.21 | 1 | 0.90 |
| 700：芸　術 | — | — | — | — |
| 800：語　学 | 1 | 0.29 | — | — |
| 900：文　学 | 2 | 0.29 | — | — |
| （計） | 342 | 100.00 | 111 | 100.00 |

270　78.9%

**第2表**：法律部門（320～9）内での主題拡散度（欧文誌）

| N. D. C.（320）要目 | タイトル数（種） | 百分率（%） |
|---|---|---|
| 320：法律一般 | 45 | 47.36 |
| 321：法学・法哲学 | — | — |
| 322：法制史・外国法 | — | — |
| 323：憲法・行政法 | 10 | 10.52 |
| 324：民法・私法一般 | — | — |
| 325：商　法 | 5 | 5.26 |
| 326：刑　法 | 2 | 2.10 |
| 327：司法・訴訟手続法・法務 | 2 | 2.10 |
| 328：諸　法 | 1 | 1.05 |
| 329：国際法 | 30 | 31.57 |
| （計） | 95 | 100.00 |

**第3表**：和文誌順位表（自誌引用を加算）

| 順位 | 誌　　名 | 引用回数 | 百分率（%） |
|---|---|---|---|
| 1 | ジュリスト（SM） | 304 | 7.84 |
| 2 | *法学協会雑誌（BM） | 294 | 7.58 |
| 3 | 法律時報（M） | 220 | 5.67 |
| 4 | 民商法雑誌（M） | 139 | 3.58 |
| 5 | *法　学（Q） | 117 | 3.02 |
| 6 | *北大法学論集（SA） | 117 | 3.02 |
| 7 | 判例タイムズ（M） | 115 | 2.96 |
| 8 | 判例時報（3/M） | 110 | 2.83 |
| 9 | 法学論叢（M） | 109 | 2.81 |
| 10 | *法学新報（M） | 106 | 2.73 |
| 11 | 法曹時報（M） | 104 | 2.68 |
| 12 | 法律新聞（W） | 79 | 2.03 |
| 13 | 国家学会雑誌（BM） | 74 | 1.91 |
| 14 | *阪大法学（Q） | 69 | 1.78 |
| 15 | 朝日新聞（D） | 55 | 1.41 |
| 16 | 私　法（A） | 51 | 1.31 |
| | （小計） | 2,063 | 53.25 |
| 17位以下 | | 1,811 | 46.75 |
| 全引用回数 | | 3,874 | 100.00 |

* 調査対象雑誌（Source Journals）

**第4表**：欧文誌順位表

| 順位 | TITLES | 引用回数 | 百分率（%） |
|---|---|---|---|
| 1 | Harvard Law Review. | 303 | 18.48 |
| 2 | Neue Juristische Wochenschrift. | 229 | 13.97 |
| 3 | Yale Law Journal. | 173 | 10.55 |
| 4 | Columbia Law Review. | 162 | 9.88 |
| 5 | Zeitschrift für die gesamte Strafrechtswissenschaft. | 153 | 9.33 |
| 6 | Deutsches Verwaltungsblatt. | 91 | 5.55 |
| 7 | Law Quarterly Review. | 87 | 5.30 |
| 8 | American Journal of International Law. | 82 | 5.00 |
| 9 | Michigan Law Review. | 74 | 4.51 |
| 10 | Juristische Zeitung. | 68 | 4.14 |
| 11 | University of Chicago Law Review. | 59 | 3.59 |
| 12 | Monaschrift für Deutsches Recht. | 57 | 3.47 |
| 13 | Öffentliche Verwaltung. | 51 | 3.11 |
| 14 | Entscheidungen des österreichischen Obersten Gerichtshofs..... | 50 | 3.05 |
| | （計） | 1,689 | 100.00 |

をとってみた（第2表）。法律一般（320）が約50%に達するが，その多くは Law School の Legal Periodicals であり，キー・ワードとしても Law Review, Law Journal といった一般語に各 Law School の個有名詞が組み合さった誌名である。今回の調査で判明したことは，アメリカの Law School で刊行している雑誌は非常に高い率で引用されているということであった。

## Ⅳ．誌名分散度

誌名分散度（title dispersion of the cited serials）は，つまり誌名単位の引用集中度であり，引用順位表（lanking list）や基本雑誌精選リスト（basic minimum collection）を作成しようとする尺度でもある。

和文誌の引用累積値の53%台を確保するためには，上位16種を用意しなければならない（第3表）。

ここで注目したいのは，自誌引用を除いた順位を作成してみると，大学関係の紀要では「法学協会雑誌」（東大）のみが上位にランクされる結果となった点である。

同様に欧文誌について，上位グループをみるとその特徴は明白である。Harvard, Yale, Columbia, Michigan, Chicago 系が断然強い（第4表）。

## Ⅴ．言語分散度

言語別の引用文献度数をみると，英語（250誌：49.3%），独語（184誌：35.5%），仏語（60誌：11.8%），その他の言語（13誌：3.4%）となった。

逐次刊行物に関する利用調査で，引用文献分析による科学的アプローチは，Gross and Gross 方式にはじまり，ブラッドフォードのバラツキ理論（Bradford's Law of Scattering）で頂点に達した。特定の主題をつかまえて分析してみると，予期せぬ有意義な収獲をうるものである。"捨小就大"という言葉があるが，このような調査の場合こうした識別力が特に必要であろう。

注　1). 宮地見記夫：引用文献からみたわが国経済学と周辺領域との関係。図書館界　23（3）：101-4, 1971.

* この小論は慶應義塾大学大学院文学研究科図書館・情報学専攻課程修士論文（委託研究生）として提出した（昭和46年度）ものの一部を改稿したものである。

## 専門職の問題と図書館員の心情

渋　川　雅　俊

この夏の私立大学連盟図書館研究集会で，ある大学の図書館長の図書館員評——

「……図書館員は，総じて消極的であり，保守的であり，変化する諸状況に対処することを臆劫がる性格をもっている。性質は暗く，劣等感に凝り固まっているようにもみうけられるが，それは，図書館員のもっている個有の文化，ないしは技術に対する優越感の裏がえしであろう。そのような小文化にしがみついているために閉鎖的で，独善的であり，特殊な隠語を口にしては一般の人を煙にまくようなことをする。

……一般にも“専門的”だとみられているもので，図書館員自身もそう自覚している仕事に，目録と分類があるが，これらの仕事を通じてあらわれる彼らの気質は，俗に我々が云う“職人気質”に他ならない。こうした気質は，彼らに図書館の本来の目的を忘れさせ，目録法や分類法など，本来は，その目的達成の手段として考えられた技術を彼らの目的と考えるようにしてしまった。

……“専門職”の本質を論じ，それと現在の図書館員諸氏の仕事を照らし合せるまでもなく，“専門職”とはそのように視野の狭いものではないだろう。今のままでは，残念ながら我が親愛なる図書館員諸氏を専門職と認めるには躊躇せざるを得ない……」

かなり辛辣な批評である。しかし，これを聴く参加者は，ただ苦笑するのみであった。

この研究集会では，「大学図書館における専門職制度の確立」という共通テーマのもとで，大学図書館員を大学の中で専門職として発展，確立させる要件や方法について討論がなされた。さきの図書館員評は，この研究集会の冒頭の問題提起として受けとってよいであろう。

“図書館員は専門職か”ということは，非常に長い間，図書館関係者のなかで議論されてきた問題であり，専門職制度の確立ということは，他の専門的職業の場合と同様に，職業，地位，待遇の向上をはかることを目的としている。しかし，図書館員の場合には，職業としての現状に，他の場合とは違って専門職として認識されにくいいろいろな要素を背負ってきている。なかでも，最も重要なのは，図書館員が利用者に対して何かできるかということであろう。逆のみかたをすれば，図書館員とは，利用者にとって何かということである。

研究集会においては，専門職制度の確立ということはさておき，この問題に討論が集中した。そして，先の講演とは別に参加者のこの問題についての心情は——

……図書館員は専門職であろう。しかし，今日の我々の仕事の内容からみて，現在の図書館員を専門職とは云えない。図書館員が専門職であると宣言できるのは，利用者に対して図書館員の本来のはたらきをするようになってからである。大学図書館員は，今日的な云いかたをすれば学術情報流通の一つの担い手である。専門職たり得るためには，まず図書館員一人一人がその自覚にもとずき学術情報流通に関するあらゆる要求を解決できる能力をもたなければならない。そういった図書館員を作るものは第一に我々自身の努力であろう。そして，もし許されれば，そうした努力ができるだけ効果的に実を結ぶように，我々自身を訓練する機会と環境を整備されることが望ましい——

（三田情報センター職員）

資料 I

# 昭和46年度私立大学研究設備整備費補助金による購入図書資料一覧

| 図書資料名 | 数量 | 金額(円) | 代表申請者 |
|---|---|---|---|
| ・American Literature. vol. 1-37 (1929/30～1965/66) | 1 set | 318,000 | 厨川文夫 |
| ・Chicago Review. vol. 1-20 (1946～1968) | 1 set | 188,000 | (一般・人文科学系) |
| ・Partisan Review. vol. 1-15 (1934～1948) | 1 set | 165,000 | |
| ・American Mercury. vol. 1-28 (1924～1933) | 1 set | 246,400 | |
| ・Accent. A Quarterly of New Literature vol. 1-20 (1940/41～60) | 1 set | 110,000 | |
| ・American Review. vol. 1-9 (1933～1937) | 1 set | 108,900 | |
| ・Little Review. vol. 1-12 (1914～1929) | 1 set | 112,800 | |
| *Modern Language Association of America: | 1 set | 284,860 | |
| ・Center for Edition of American Authors. | | | |
| ・Works of Stephen Crane. 4 vols | | | |
| ・The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson. 8 vols | | | |
| ・Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne. 5 vols | | | |
| ・The Works of William Dean Howells. 7 vols | | | |
| ・The Complete Works of Washington Irving. 3 vols | | | |
| ・The Writings of Herman Melville. 5 vols | | | |
| ・Mark Twains Papers. 6 vols | | | |
| ・The Collected Writings of Walt Whitman. 13 vols | | | |
| ・Works of Sherwood Anderson. 2 vols | | | |
| ・Midland: A Magazine of the Middle West. vol. 1-20 (1915～1933) | 1 set | 111.300 | |
| ・College English National Council of Teachers of English. vol. 1-15 | 1 set | 112,000 | |
| ・Hound and Horn. vol. 1-7. | 1 set | 100,000 | |
| ・Huguet, E.-Dictionnaire de la langue française du 16e siècle. 7 vols. 1969 (reprint) | 7 | 192,000 | 白井浩司 |
| ・Cahiers verts. no. 1-70. 1921～1927. (original) | 70 | 220,000 | (一般・人文科学系) |
| ・Balzac: Oeuvres complètes. | 1 set | 166,000 | |
| ・Petites revues françaises. | 1 set | 177,000 | |

| 図　書　資　料　名 | 数量 | 金　額 (円) | 代表申請者 |
|---|---|---|---|
| ・Campe, J H : Wörterbuch der deutschen Sprache. 5 Bde. (Olms) | 6 | 135,000 | 塚越　敏 (一般・人文科学系) |
| ・Zeitschrift für Deutsche Philologie. Bd. 1-58, 1869～1933 (Reprint) | 58 | 556,850 | |
| ・Report of the Science and Art Dept of the Committee of Council on Education. 1st-6th Report. London (1854～1899) (Xerox ed.) | 1 set | 1,170,000 | 西村　皓 (一般・人文科学系) |
| ・Philosophy. vol. 1-20. (Reprint) | 1 set | 158,400 | 山崎照雄 (一般・人文科学系) |
| ・Hermes. vol. 1-79. (Reprint) | 1 set | 792,000 | |
| ・College English. vol. 1-25 (1939/40-1963/64) | 1 set | 231,000 | 荒木良治 (一般・人文科学系) |
| ・English Journal. vol. 1-16 (1912～1927) | 1 set | 165,000 | |
| ・Modern Language Journal. vol. 1-42 (1916/17-1958/59) | 1 set | 316,000 | |
| ・Language Learning. vol. 1-17 (1951～1967) | 1 set | 100,000 | |
| ・Asian Review Series (London)<br>Ser. 1 : vol. 1-10, 1886-1890<br>Ser. 2 : vol. 1-10, 1891-1895<br>Ser. 3 : vol. 1-34, 1896-1912<br>Ser. 4 : vol. 1-60 (1), 1913-1964 | 1 set | 903,000 | 川本邦衛 (一般・人文科学系) |
| ・北京国立博物館蔵敦煌出土旧鈔本 (4,886巻のマイクロフイルム) | 86リール | 1,250,000 | 阿部隆一 (一般・人文科学系) |
| ・E. L. H. : A Journal of English Literary History. vol. 1-28, 1934～1961 (Reprint) | 1 set | 191,400 | 上田　保 (一般・人文科学系) |
| ・Walpole, H.-The Yale Edition of Horace Walpole's Correspondence Series, 31 vols. | 1 set | 217,000 | |
| *English Little Magazine:<br>・Left Review. vol. 1. no. 1-vol. 3. no. 16. (Oct., 1934-May, 1938) in 8 vols.<br>・Contemporary Poetry and Prose. no. 1-10 (May, 1936-Autum, 1937) in 1 vol.<br>・Poetry London. vol. 1. no. 1-vol. 6, no. 23 (Feb., 1939-Winter, 1951) in 5 vols. | 1 set | 106,100 | |
| ・Nineteenth Century Fiction. vol. 1-22, 1945-1968 (Reprint) | 1 set | 222,700 | |
| ・近代中国史料叢刊　第24～63輯 | 555冊 | 1,076,000 | 竹田龍児 (一般・人文科学系) |

| 図　書　資　料　名 | 数量 | 金　額(円) | 代表申請者 |
|---|---|---|---|
| ・Le Plume. vol. 1-20 (1889-1914) | 20 | 425,000 | 二宮孝顕 |
| ・La Revue Blanche. vol. 1-30 (1889-1903) | 30 | 450,000 | (一般・人文科学系) |
| ・French Studies. vol. 1-20 (1947-1966) | 20 | 172,000 | |
| ・営業報告書集成（マイクロフイルム版）第1集 原本917社，フイルム400リール（200函入） | 1 set | 1,400,000 | 庭田範秋 |
| ・The Development of Industrial Society, Ser. 1, 50 vols. | 1 set | 420,000 | (一般・社会科学系) |
| ・Zeitschrift für Betriebswirtschaft. vol. 1-19, 1924-1942 (Reprint) | 1 set | 189,200 | |
| ・Revue critique de droit International Prive. Année 1-31, 1903-1936 | 1 set | 526,000 | 金子芳雄 |
| ・太政類典・公文類聚（マイクロフイルム版） 第2編（保民・3）（明治4年8月～10年）～第3編（明治11年～明治12年）ポジ. 35mm | 75リール | 383,000 | (一般・社会科学系) |
| ・Preussisches Verwaltungsblatt. Jg. 4-40/#1-31, 1882/83-1918/19 〔Lacks: 10 Bde.〕 | 1 set | 600,000 | |
| ・Seufferts Archiv für Entscheidungen der Obersten Gerichte in den Deutschen Staaten. Bd. 1-97 (1847-1943) | 1 set | 491,000 | |
| ・All England Law Reports, 1558-1935. 36 vols. (reprint.) | 1 set | 159,840 | |
| ・American Statistical Association Journal. vol. 1-62, 1888-1967. | 1 set | 900,000 | 千種義人 |
| ・Berichte zur Deutschen Landeskunde Bd. 1-42 (1941/42-1969) 〔Lack: Bd. 6.〕 | 1 set | 460,000 | (一般・社会科学系) |
| ・The English Revolution. The First Category. 35 vols. | 1 set | 450,000 | |
| ・SIAM Review. vol. 1-12 (1959-1970) | 1 set | 162,000 | 刀根薫 |
| ・Lecture Notes in Mathematics. vol. 1-7, 9-180. | 1 set | 273,280 | (一般・社会科学系) |
| ・U. S. Federal Trade Commission Decisions. vol. 1-62, 1915-1963 | 1 set | 185,000 | 正田彬 (一般・社会科学系) |
| ・7th Collective Index of Chemical Abstracts. | 1 set | 1,125,000 | 須網哲夫 (一般・理工学科) |

資料 II

# 昭和47年度私立大学研究設備整備費補助金による購入（予定）図書資料一覧

| 図書資料名 | 数量 | 金額(円) | 代表申請者 |
|---|---|---|---|
| ・Albertus Magni Opera Omnia. 1952-70. 8 vols. | 1 set | 100,000 | 箕輪秀二 |
| ・Thomas Aquinatis Opera Omnia, Editi, Taurinensis Lecrnic. 25 vols. | 1 set | 135,000 | （一般・人文科学系） |
| ・Joannes Duns Scotus Opera Omnia, Paris, Vives 1891-1895. 1969-70. 26 vols. | 1 set | 730,600 | |
| ・四部備要　台湾中華書局　精装610冊（経部　53種 100冊，史部　76種 240冊 子部　79種　85冊，集部 144種 185冊） | 1 set | 460,000 | 村松暎 |
| ・国学基本叢書　台湾商務印書館　精装400冊 | 1 set | 320,000 | （一般・人文科学系） |
| ・Phonetica. vol. 1-22 (1956-1970) | 1 set | 178,200 | 小長谷弥高 |
| ・Lingua. vol. 1-18 (1951-1967) | 1 set | 180,000 | （一般・人文科学系） |
| ・Speech Teacher. vol. 1-16 (1952-1967) | 1 set | 100,000 | |
| ・Quarterly Journal of Speech. vol. 1-25 (1915-1939) | 1 set | 180,000 | |
| ・Speech Monograph. vol. 1-35 (1934-1968) | 1 set | 180,000 | |
| ・Word. vol. 1-22 (1945-1967) | 1 set | 108,000 | |
| ・American Anthropological Association: Memoirs. no. 1-70 (lack: no. 69) 1905-1948 | 1 set | 130,000 | 清水潤三 |
| ・British Museum Quarterly. vol. 1-31, with Index to vol. 21-30, 1926-1966. | 1 set | 190,000 | （一般・人文科学系） |
| ・California University, Publications in American Archaeology and Ethnology. vol. 1-40, 1903-1953. | 1 set | 345,000 | |
| ・Dictionary Catalog of the Library of the Bernice P. Bishop Museum (Honolulu). 1964: in 9 vols. 1st Suppl. 1967: in 1 vol. 2d Suppl. 1969: in 1 vol. | 1 set | 290,000 | |
| ・Wenner-Gren Foundation for Anthropological Research Inc. New York, Publications in Anthropology. vol. 1-23, 1943-1956. | 1 set | 105,000 | |
| ・Venturi A. Storia dell'arte Italiana. 11 vol. in 25 tomi, 1901-1950. (Reprint) | 1 set | 590,000 | 衛藤駿 |
| ・禅林墨蹟　田山方南　6冊 | 1 set | 450,000 | （一般・人文科学系） |
| ・燉煌画の研究　松本栄一　2冊 | 1 set | 200,000 | |

| 図　書　資　料　名 | 数量 | 金　額 (円) | 代表申請者 |
|---|---|---|---|
| ・Hegel, G. W. F.: Sämtliche Werke. Jubiläumsausgabe in 26 Bde. (Einschl. Hegel-Monographie, und Hegel-Lexikon v. H. Glockner.) Frommann, Stuttgart. | 1 set | 102,500 | 小泉　仰 (一般・人文科学系) |
| ・Calvin, J.: Doumergue, E.-J. Calvin: Les Hommes et les choses de Son Temps. 7 tomes (Paris, 1899-1927) 1969, (Reprint) | 1 set | 141,000 | |
| ・Revue de Metaphysique et de Morale. (Paris). vol. 1-17, 1893-1909. (Reprint). | 1 set | 172,000 | |
| ・Société de Linguistique de Paris: Bulletin. Paris, 1869-1919. vol. 1-21 en 18 vols. | 1 set | 162,000 | 佐藤　真 (一般・人文科学系) |
| ・Grand dictionnaire universel du 19e Siècle. (Paris) 1865-1876, 1878 & 1888. Vol. 1-17. | 17 | 220,000 | |
| ・Kunstchronik. Vol. 1-11 (1948-1955) | 1 set | 100,000 | 西川新次 (一般・人文科学系) |
| ・Publikation Aelterer Praktischer und Theoretischer Musikwerke. Hrsg. von Robert Eitner. 29 vols. (Bound. Folio) | 1 set | 350,000 | |
| ・Bach Jahrbuch. Hrsg. von der Neuen Bachgesellschaft. vol. 1-55 (1904-1969) | 1 set | 260,000 | |
| ・支那美術史彫塑篇 | 2冊 | 180,000 | |
| ・中国史学叢書　続編雑著秘笈叢刊共 | 280冊 | 454,000 | 阿部隆一 (一般・人文科学系) |
| ・新修方志叢刊 | 512 | 796,300 | |
| ・明代史籍彙刊　第Ⅰ. Ⅱ輯 | 80 | 133,000 | |
| ・中国方志叢書 | 307 | 938,000 | |
| ・Analecta Hymica Medii Aevi. (Leipzig) vol. 1-55, 1886-1922 | 1 set | 495,000 | 柏木英彦 (一般・人文科学系) |
| ・Der Islam: Zeitschrift für Geschichte und Kultur des islamischen Orients. 24 vols. | 1 set | 184,000 | |
| ・Revue du Moyen Age Latin. (Strasbourg). vol. 1-14, 1945-1953; vol. 19-20, 1963-1964 (N. Y. P. vol. 15-18). | 1 set | 100,000 | |
| ・Beirut, Lebanon. Universite St. Joseph. Faculte Orientale. Melanges. vol. 1-26, 1906-1946 (Kraus Rep., Lichtenstein) | 1 set | 204,000 | |
| ・Allgemeine Musikalische Zeitung. Frits Knuf NV, Amsterdam. vol. 1-50 (1798-1848) (Reprint). | 1 set | 585,000 | 徳永隆男 (一般・人文科学系) |
| ・Neue Zeitschrift fuer Musik. (Founded by Robert Schumann in 1834). 1834-1880 (Reprint). | 1 set | 900,000 | |
| ・外務文省書　昭和年間　1940-1945 240 Reels. | 1 set | 972,000 | 内山正熊 (一般・社会科学系) |
| ・Verhandlungen des Deutschen Bundestages. 41 Bde. | 1 set | 486,100 | |
| ・Известия. Февр./1917-ЯнВ./1955 | 1 set | 405,000 | |

| 図　書　資　料　名 | 数量 | 金　額 (円) | 代表申請者 |
|---|---|---|---|
| ・Власть Советов.<br>Орган народного комиссариата внутренних дел. 1917-1924 гг.<br>Орган всероссийского центрального исполнительного комитета. 1924-1938 гг. | 1 set | 280,000 | |
| ・Philosophy of Science. (Philosophy of Science Association) vol. 1-23 (1934-1956) | 1 set | 180,000 | |
| ・Radical Periodicals. | 5 sets | 411,000 | 鳥居泰彦 |
| ・United States Works Progress Administration. (Research Monographs Series) vol. 1-26 | 1 set | 105,000 | (一般・社会科学系) |
| ・Reprints periodicals of International Statistical Institute.<br>1. International Statistical Institute Review. vol. 1-8 (1933-1940)<br>2. Statistical Theory and Method Abstracts. vol. 1-9 (1959-1968) | 1 set | 171,000 | |
| ・マイクロフイルム版　府県統計書集成　昭和年間 35mmポジ.（47道府県324リール，増補5府県6リール，計330リール） | 1 set | 1,030,000 | |
| Die Rote Fahne.<br>Ehemaliger Berliner Lokal-Anzeiger.<br>(Later: Zentralorgan des Spartakusbundes Zentralorgan der KPD)<br>Jg. 1-15, Nov. 9, 1918-Sept. 8, 1932; Aug. -Nov. 1935-No. 8, 1938, Incomplete.<br>(Microfilm, 28 Reels) | 1 set | 238,000 | |
| ・English Revolution Newsbooks. 30 Vols. | 1 set | 450,000 | 藤沢益夫 |
| ・Harvard Bussiness Reports. (Graduate School of Business Administration) vol. 1-11 (1925-1932) | 1 set | 130,000 | (一般・社会科学系) |
| ・Hunt's Merchant Magazine. vol. 1-63, 1839-1870. (Reprint) | 1 set | 560,000 | |
| ・マイクロフイルム版　営業報告書集成<br>第二集　原　本……460社　20万頁<br>フイルム……35mm ポジ. 110リール(55函入)<br>索　引……A5版　50頁 | 1 set | 550,000 | |
| ・Board of Trade Journal. United Kingdom. H. M. S. O. vol. 1-75 (1886-1911) Microfilm ed. 50 reels. | 1 set | 340,000 | |
| ・Journal of Business of the University of Chicago. vol. 1-34 with suppl. vol. 6/20 | 1 set | 324,000 | 石田英夫 |
| Harvard University. Graduate School of Business Administration.<br>(a) Bureau of Business Research Bulletin. no. 1-166, 1913. [Lacks: 3 nos.]<br>(b) Business Research Studies. no. 1-32, 1933-1944. (Xerox ed.) | 1 set | 360,000 | (一般・社会科学系) |

| 図　書　資　料　名 | 数量 | 金　額(円) | 代表申請者 |
|---|---|---|---|
| •Physical Society, Proceedings. vol. 1–70. (1875–1945) | 1 set | 1,050,000 | 水島三知<br>(理工学系) |

# 編集後記

◇現代インドの著名な図書館人 S. R. Ranganathan の言葉に「図書は利用する為にある」と言うのがあります。一見わかりきった言葉のようですが，それでは如何にして実行に移すかとなると，それぞれの図書館により実に千差万別であります。今回はその一例として三田の図書館を対象にして，神谷ゼミナールの面々に図書館の利用について忌憚なく話していただきました。関係者の大いに参考になる意見を伺った反面，情報センターの現状を多少とも理解していただけたかとも思います。公式であれ非公式であれ，利用者の声には常に耳を傾けて行く積りでおります。

◇“公害”“公害”と一日としてこの言葉を耳にしない日はない昨今です。しかしその根は古く，その歴史も又古くあります。小松助教授のルポは公害問題の原点とも言われる足尾鉱毒事件を実践を踏まえて報告されたもので興味深いものがあります。

◇「逐次刊行物の利用パターン」(奥泉)は引用文献の面より雑誌利用の一面を解剖しようとしたもので，従来自然科学の分野では，この種の調査は事新しいものではありませんが，人文・社会科学系では，これからの感を深く致します。

◇1972年もまた学園の内外に学生問題は絶えませんでした。ジャーナリズムがセンセーショナルに報道するのは多くは悲しい事件でありました。が，一方では孜孜として勉学に励む学生のいることも我々は知っております。関係者が努力をゆるがせにできない所以であります。今後とも利用者各位の協力と理解を乞う次第です。

(森園)


**編集委員**

| | |
|---|---|
| 本部事務室 | 渋川雅俊 |
| 三田情報センター | 森園　繁 |
| 日吉情報センター | 木村八重子 |
| 医学情報センター | 野添篤毅 |
| 理工学情報センター | 中島紘一 |